

靈界物語

美善美大宅

申之卷

出口瑞月口述

宗教
III
143

314978



始



函	宗教
	四
號	143
永久保存	

1501
248

教	宗
第	号
祭	

出口瑞月口述

眞善美愛



天聲社發行

〔靈界物語第五十七卷〕

1094682

出口部凡口紙

真善美



天發地錄

1094685



(影撮日六月四) 自刀子米母生御ミ生先大月瑞の畔井の玉太穴



序

文

伯耆國皆生温泉濱屋旅館の見晴し良き二階の廣間を當がはれ、朝日の光と大山の雄姿を眺め乍ら、大正十二年如月八日より十日迄三日間にていよく第五十七巻を口述し了りぬ。

スーラヤ（日天子）チャンドラデーワプトラ（月天子）サマンタガン（普光天子）ラトナブラバ（寶光天子）アワバーサブラ（光耀天子）の守護の下に、漸く印度の國波斯の國境テルモン山の昔物語を大要述べ了りました。顧みれば瑞月が神の大道に入りしより滿二十五年に相當する今日、富士の神使に導かれ神教を傳ねられたる今日出雲富士とて名も高き大山の雄姿を拜し、三保の松原に等しき夜見ヶ濱の白砂青松の

磯邊を筆者と共に逍遙しながら、今昔の感に打たれ、思はず歎息せざるを得ない。隠岐の嶋は遠く波間に浮び、幽かな山の頂きを顯はし、三保ヶ關の靈地は眼前に横はりに本海の波に漂わゆるが如く見えて居る。八大龍王ナンダナーガラシーヤ(歡喜龍王)、ウバナンダ(善歡喜龍王)、サーガラ(海龍王)、ワーシニキ(多頭龍王)、タクシヤカ(視毒龍王)、マナスキン(大身大力龍王)、ウツバラカ(青蓮華色龍王)、アナワタブタ(無惱清涼龍王)、は鼓を打つて我等一行を迎へ給ふ。北村隆光、加藤明子、藤田、松田、紙本の諸氏を始め谷川常清氏、湯淺清高並に米子支部信考、及び近國の信者諸氏の日々の訪問を歡喜し乍ら、神の恵みのまに／＼五七の巻を演べ了る。時しも綾の聖地より三代直澄教主は大本瑞祥會々長井上留五郎氏及び前會長湯川貫一氏と俱に來らる。瑞月は感極まつて言ふ所を知らず。茲に序文に代わ一言を記すこと、致しました。

大正十二年舊二月十日

於伯州皆生温泉 口述者

瑞月

竹藪を切り拂ひてゆ小雀の

聲さねもなき長閑な城趾

土堤に立ちて龜岡城趾眺むれば

巨石たゝみの最中なりけり

會心の友なき吾は只一人

事業を友とし春を楽しむ

瑞 月

夜もすがら蚤に攻められ眠り得ず

都にゐます君ぞ惚ばゆ

酔どれが千鳥足にて歩み行く

千鳥の淵邊いとも危ふく

大本教スタイルゑいぞとぞめかれて

川の上を降る舟のまばゆさ

眞善美愛(申の巻) 目次

序	文	頁
総	説	一

第一篇 照門山嵐

第一章	大山	七
第二章	煽動	二三
第三章	野探	四一
第四章	妖子	五四
第五章	糞闘	七三
第六章	強印	九〇

目次

第七章	暗 <small>くら</small>	闇 <small>くら</small>	一一三
第八章	愚 <small>おろこ</small>	摺 <small>すり</small>	一一八

第二篇 顯幽両通

第九章	婆 <small>ば</small>	婆 <small>ば</small>	一四九
第一〇章	轉	香 <small>か</small>	一六五
第十一章	鳥	逝 <small>し</small>	一八二
第十二章	三	狂 <small>きやう</small>	一九九
第十三章	惡	醉 <small>すい</small>	二一七
第十四章	人	畜 <small>ちゆう</small>	二三二
第十五章	糸	瓜 <small>か</small>	二四七
第十六章	犬	勞 <small>らう</small>	二六五

第三篇 天上天下

第十七章	涼	窓 <small>まど</small>	二八一
第十八章	翼	琴 <small>こ</small>	二九〇
第十九章	抱	月 <small>つき</small>	三〇四
第二〇章	犬	鬪 <small>たう</small>	三一四
第二十一章	言	觸 <small>さふ</small>	三二三
第二十二章	天	葬 <small>さう</small>	三三二
第二十三章	藥	罐 <small>かん</small>	三四四
第二十四章	空	縛 <small>さく</small>	三五四
第二十五章	天	聲 <small>こゑ</small>	三六六

眞善美愛(申の卷)目次終

眞善美愛

【申の巻】 [57]

口述者

出 戸

瑞

月

筆録者

加藤
北村

明

光子

總 說 歌

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

善の中にも悪があり

悪の中にも善がある

善悪正邪はオーニの

知識の程度で判らない

唯何事も惟神

神の御旨に任すのみ

總 說 歌

此の世を造りし神直日
 只何事も人の世は
 世の過ちは宣り直せ
 天津使のエンゼルの
 充され肉体人に容り
 奉仕せんため生れ來ぬ
 御靈幸はへまして
 誠の神が降りまし
 任さし玉ひし尊さよ
 黑白も判かぬ時なれど

心も廣き大直日
 直日に見直し聞き直し
 人は神の子神の宮
 その精靈に神格を
 天地經綸の神業に
 ア、惟神 々々
 此の世の終りに日地月
 瑞の御靈に神業を
 世は常暗となり果て、
 光の神は御空より

鳩の如くに降りまし
 經綸さるゝぞ有難き
 嚴の精靈に神格を
 出口の守と現れて
 漸く近づき來りけり
 青人草の末までも
 最後の光明良めなり
 神の生宮豫言者の
 ア、惟神 々々
 朝日は照ることも曇ることも

空前絶後の神業を
 國の御祖の大御神
 充たし豫言者の体に依り
 この世を照し玉ふ世は
 仰ぎ敬へ四方の國
 三五教の御教は
 眼を醒ませ耳開き
 貴の言靈守るべし
 御靈幸はへましてよ
 月は盈つことも虧くることも

地震り海は淺するじも 誠一つは世を救ふ
 エスベラントやバハイ教 紅卍字教や普化教も
 残らず元津大神の 仕組み給ひし御經綸
 その外諸々の神教は 此の世の末に現はれて
 世を立直す爲ぞかし 國會開きが始まりて
 十二の流れ一時に 清く流る、和田の原
 底井も知れぬ海潮の 深き思ひぞ計れかし
 いよく五六七の世となれば 山河草木言ふも更
 禽獸虫魚も押並べて 神の仁慈の露にぬれ
 一入清き靈光を 照らし榮ふる世とならん



仰ぎ敬へ神の徳

慶び奉れ神の愛

大正十二年舊二月十日

皆生温泉にて 口述者 出口瑞月

瑞月

圓山や空に金柱みろく塔
 五六七塔片側濡らす春の雨
 光照殿地均し工事雨三日

瑞月

石垣の高さに見ゆる經綸しんりんかな
諸々の人より來る萬壽苑
瑞靈の恵みも高し天恩郷
丸窓に彌生の満月影おほろ
雨やみて頬白の聲いと清し

第一篇 照門山嵐

第一章 大

山 (一四五二)

金輪奈落の地底から

風輪、水輪、地輪をば

貫き出でたる大高峯

伯耆の國の大山は

日本大地の要なり

白扇空に逆様に

懸りて沈む日本海

入岐大蛇の憑依せる

大黒主の曲津見が

簸の川上に割據して

風雨を起し洪水おこし

細田や長田に生ひ立ちし

稲田の姫を年々に

惱ませ人の命をば

取らんとせしぞうたてけれ

大正十二癸の

亥年の春や如月の

日光輝く夜見ヶ濱

小松林の中央に

又上磐常磐に築きたる

神の恵の温泉場

濱屋旅籠の二階の間

いつもの通り横に臥し

眞善美愛第九卷

波斯三月の國境

朝日もきら／＼テルモンの

山の館に住まひたる

鬼國別が物語

三千年の末迄も

その功を殘したる

三五教の三千彦が

難行苦行の經緯を

いよ／＼カータルブラバーサ マハーダルマ、タダアガタ

唯一言も漏らさじと

東の窓に向ひつゝ

萬年筆を走らせる

夜見の濱風颯々

吹き來る度にカーテンが

バタリ／＼と拍子取り

言靈車押し來る

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

五十三七つの物語

完全に委曲に述べ終へて

綾の聖地の家苞に

なさしめ給へと大神の

御前に謹み願きまつる

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

假令大地は沈むことも

誠一つの三五の

教の主意を一通り

寫さにやならぬ神の法

湯にあてられて瑞月が

腹をガラ／＼下らせつ

下らぬ理屈を交せて

濱邊で取れた法螺貝の

止度もなしに吹き立てる。

○

三五教は大神の直接内流を受け、愛の善と、信の眞をもつて唯一の教理となし、智愛勇親の四魂を活用させ、善の爲に善を行ひ、用の爲に用を勤め、眞の爲に眞を勵む。故に其言行心は常に神に向ひ、神と共にあり、所謂神の生宮にして天地經綸の主宰者たるの實を擧げ、生き乍ら天國に籍を置き、恰も黄金時代の天人の如く、神の意志其儘を地上の蒼生に宣傳し、實行し、以て衆生一切を濟度するをもつて唯一の務めとして居たのである。故にバラモン教ウラル教其他數多の教派の如く、自愛又は世間愛に墮して知らずくに神に背き、虚偽を眞理と信じ、惡を善と誤解するが如き行動は取らな

つたのである。神より來れる愛及び善、並に信眞の光に浴し、惟神の儘に其實を示すが故に、麻柱の教と神から稱へられたのである。自愛及び世間愛に墮落せる教は所謂外道である。外道とは天地惟神の大道に外れたる教を云ふ。これ皆邪神界に精靈を蹂躪され、知らずくに地獄界及び兇黨界に墮落したものである。外道には九十五の種類があつて、其重なるものは、カピラ、マハールシと云ふ。このカピラ、マハールシは、則ち大黒主の事であり、三五教の眞善美の言靈に追ひ巻られて自轉倒島の要と湧出したる伯耆の國のマハールシ(大山)に入岐大蛇の靈と共に割據し、六師外道と云つて外道の中でも最も勝れたる惡魔を引き率れ天下を攪亂し、遂に素盞鳴尊のために言向け和されたのである。六師外道とは、ブランナーカーシャバ。マスカリ、ガーシャリープトラ。サンジャイーブイ、ラチャープトラ。アザタケー、シャカムバ

ラ。カクダカー、トヤーヤナ。ニルケラントー、ヂニヤー、ヂブトラの六大外道である。此外道は古今東西の區別なく今日も雖も尙天下を横行濶歩し、暴威を逞しうして居るのである。

ブランナーカーシヤバニは君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等の道を軽んじ、現界の一切を無視し、生存競争、優勝劣敗をもつて人生の本義をなし、輕死重生の主義を盛に主張し、宇宙一切は總て空なり、無なり、人間の肉体は死滅するや否や煙の如く消え果て、死後の靈魂なきは決して残るものでない。果して死後に靈魂ありとすれば、例ば唐辛を焼いて灰となし、尙ほ其後にも唐辛の辛味存するや、決して存在せざるべし是を思へば人間死後の生活を論ずるは迂愚の骨頂なり、迷妄の極みなりと斷案を下す唯物論者の如きものである。次に、

マスカリー、ガーシヤリーブトラは、一切衆生の苦惱も歡樂も決して人間の行因に依るものではない。何れも自然に苦樂が來るものである。例ば、茲に一つの種子を蒔くに、其種子は肥れた土の日當りよき所に蒔かれたのは、他に勝れて發達し、枝葉繁茂し、麗しき花を咲かせ、麗しき實を結び、人に愛せらるゝに引き替へ、同じ種子でありながら、瘦た土地に蒔かれ、或は陰裏に蒔かれた時は十分の光線を受くる事能はず其發育も悪しく、花も小さく、満足な實も結ばないやうなものである。然るに其種子に善惡は決して無い。同じ木から取つた同じ種である。又其種には決して善の行ひも惡の行ひもない。唯蒔かれた所の場所即ち境遇によつて、或は歡喜に浴し、或は苦惱に浸るのである。故に人間は、蒔かれた所が悪ければ、何程氣張つてもよき場所に蒔かれた種に勝つ事は出來ない。故に人間の苦樂には決して行因はないものだ、と主張

する無因外道である。又是を自然外道とも云ふ。次に

サンジャイブイ、ラチャーブトラと云ふのは、人間は決して修業なんかする必要がない。天地の草木を見ても春が来れば自然に花が咲き、秋が来れば自然に實が成り、冬が来れば自然に葉が散る如く、八萬劫が来れば自然に人間の苦は盡きて道を得るとなすものである。要するに自暴自棄、惟神、中毒の外道であつて、是を無因外道の一種となすのである。二十世紀の三五教には此種の人々が随分混入して居るやうである。次にアザタケー、シャカムバラ、此外道は現世に於て、何でも構はぬ、苦しみをさへして置けば、きつと他生に於て、天國に生れ、無限の歡樂に浴し、百味の飲食を與へられ榮耀榮華に平和の生活を永遠無限に送られるものとなし、人間として營むべき事業も爲さず深山幽谷に身を潜め、火物斷をしたり、穀食を避け、松葉を噛み、芋なごを掘り

空氣を吸ひ、寒中眞裸、眞裸足となりて寒さを耐へ、夏は蚊に刺されて所有苦しみをなし、其苦の報ひを來世に得んとする、所謂苦行外道である。此外道も亦今日は随分彼方此方に現はれて居る。さうして眞理に暗き現在の人間はかゝる苦行外道を指して眞人となし、聖人と尊び神佛の如く尊敬するものである。斯かる苦行外道を尊敬する人間も亦、同氣相求むるの理によつて知らずくりに地獄道に籍を置いて居る小外道である。次に

カクダカー、トヤーヤナ、此外道はバンロギズム(汎理論)スピリチュアリシックパンセイズム(唯心的汎神論)だとか、バンフシギズム(汎心論)だとか、アーセイズム(無神論)だとか、ブルラリズム(多元論)だとか、モニズム(一元論)だとか或はソシアリズム(社會主義)アナーキズム(無政府主義)だとか、ニヒリズム(虛

無主義)だとか、コンミニニズム(共產主義)だとか、種々雑多の利己的、形体的、自然的、世界的愛に對して意見を盛に主張し、無形の靈界に對して一瞥も呉れず、且つ靈界や神佛を無視しながらも、現界に於ても徹底する能はず、靈界に於ては等閑ながら、或時は些しく靈界の存在を認めて見たり、或時は現界許りに執着したり、精神の歸着點を失ふたり、二途不攝の異見外道である。次に

ニルケラントー、デニヤーデブトラ、此外道は、人間の苦樂と云ふものは素から因縁が定つて居るものだ。例へば三碧の星はさうだとか、九紫の星はさうだとか、子の年に生れたからさうの、丑の年に生れたからさうだとか、身魂の因縁が好いとか悪いとか、宿命説に墮落した宿命外道である。斯る宿命外道は如何程神佛を信仰するとも、自分の定まつた運命を轉換する事は出来ない。何事も運命と諦めて其道に殉ずるよ

り外はない。オタマ杓子は鯰に似て居るが、少し大きくなるに手足が生れて蛙になつて了ふ。さうしても鯰になる事は出来ない。それ故因縁の悪いものが神を信じた所で誠を盡した所で決して立派なものになれさうな事はない。何も前世の因縁性來だと斷定を下す無明暗黒なる常見外道であるが、斯の如き外道は、何れも神或は佛以外の所見にして、各一派の學説を立て、科學に立脚したる靈魂研究でなければ駄目だとか、或は神佛の名を標榜する事を忌み嫌ひ、太靈道だとか、二燈園だとか、或は何々會だとか、勝手な名を附して靈界を研究せんとする所謂常見外道である。現代は此外道最も蔓延し神佛の名を稱ふるよりも靈智學とか、神靈研究だとか、靈學研究會だとか云ふ科學的名稱に隠る、を以て文明人の態度らしく装ひ、蟻の甘みに集ふが如く集まり來つて、雲の彼方の星を探らふとする如き外道である。斯の如きニルケラントー、デニ

ヤーヂブトラは三五教の中からも折々發生したものである。何れも自尊主義の慢心から、斯る外道に知らずく墮落するものである。

序に十二因縁を略解して置く、人間には

- 一、無明、ア非ドヤ
- 二、行、サンスカーラ
- 三、識、ボヂニヤーナ
- 四、名色、ナーマルーバ
- 五、六入、サダーヤタナ
- 六、觸、スバルシャ
- 七、愛、エータナー

- 八、愛、ツルシニューナー
 - 九、取、ウバーダーナ
 - 十、有、バヴ
 - 十一、生、ヂヤーチ
 - 十二、老死、ヂャラー、マラナ
- の十二因縁がある。

無明とは、過去一切の煩惱を云ひ、行とは過去煩惱の造作を云ひ、識とは現世母の体中に托する陰妄の意識を云ふ。名色の名とは心の四蘊であり、色とは形質の一蘊である。六入とは、母の体中にある中に於て六根を成ずるを云ふ。觸とは三四才迄に外的の塵埃の根元に觸る、を覺ゆる状態を云ふ、愛とは生れて五六才より十二三才迄の

間に強く外部の塵埃を受けて、好悪の識別を起すを云ふ。愛は十四五才より、十八九才迄の間に外塵を貪り愛する念慮を起すを云ふ。取は二十才以後一層強く、外塵に執着の念を生ずるを云ふ、有とは、未來三有の果を招くべき種々の業因を造作し、積集するを云ふ。生とは未來六道又は入蘊の中に生ずるを云ふ。老死とは未來愛生の身体、又遂に朽壞するを云ふ。この十二因縁はさうしても人間として避くべからざる事である。併し乍ら、此十二因縁の關門を通過して初めて人間は神の生涯に入り、永遠無窮の眞の生命に入つて、天人的生活を送るべきものである。然るに總ての多くの人間は九十五種外道のために身心を曇らされ忽ち地獄道に進み入り、宇宙の大元靈たる神に背き、無限の苦を嘗むるに至るものが多い。故に神は、嚴瑞二靈を地上に下して天國の福音を普く宣傳せしめ、一人も残らず天國の住民たらしめんと、聖靈を充して

豫言者に來らせ給ふたのである。如何に現世に於て聖人賢人、有徳者と稱へらる、其靈界の消息に通ぜず、神の恩恵を無みするものは、其心既に神に背けるが故に、到底天國の生涯を送る事は出來難いものである。約束なき救ひは決して求められないものである。故に神は前にシヤキームニ、タダーガタを下して靈界の消息を世人に示し給ひ又ハリストスや、マホメット其他の眞人を豫言者として地上に下し、萬民を天國に救ふ約束を垂れさせられた。されど九十五種外道の跋扈甚だしく、神の約束を信するもの殆んど無きに至つた。それ故世は益々暗黒となり、餓鬼、畜生、修羅の巷となつて仕舞つた。茲に至仁至愛なる皇大神は、この慘狀を救はんが爲に、嚴瑞二靈を地上に下し、萬民に神約を垂れ給ふたのである。あ、されど無明暗黒の中に沈める一切の衆生は救世の慈音に耳を傾くる者は少い。實に思ふて見れば悲惨の極みである。あ、

惟神靈幸倍坐世。

(大五一二、三、二四、舊二、八、於伯耆國皆生溫泉濱屋、加藤明子跋)

瑞月

夕焼けの空を眺めて翌日を祝ぎ

初雷も交りて花のあらし山

火喰い(低い)鳥金光の空に高く舞ひ

普選通過猫も杓子も腕まくり

鐵筆を振つて鐵外彫刻詩

第二章 煽

動(一四五二)

テルモン山の神館の奥の間には、鬼國別の病益々重く、命旦夕に迫つて來た。館の内は上を下へ騒ぎ廻り、鬼國姫、三千彦及び家令のオールステンは、二人の看護婦と共に病床につき、死に行く人の身の上を案じ、胸を躍らせつ、あつた。三千彦は最早是非なしと神に向つて天國へ救ひ玉はん事を祈願した。鬼國別は顯幽辨別のつかざる精神状態となつた。鬼國別は嬉しさうな顔して空を眺め、

鬼國「ア、貴方はチャンドラ、デーワブトラ様(月天子)、貴方はスーラヤ様(日天子)ようまあ……只今参ります。併し乍らモウ一目我二人の娘に會ふまで御猶豫を下さ
いませ。ア、何と云ふマノーヂニヤスブラ(樂音)だらう。女房にもあの聲が聞か

してやり度い。これ鬼國姫、お前はあのマノーヂニヤスブラ（楽音）が聞かて居るか。あの綺麗なエンゼルが目につくか。もしくエンゼル様、暫らく御猶豫を願ひます。これが此世の別れでムいますから」

と頻りに掌を合して居る。

姫「モシ旦那様、確りして下さいませ。貴方は病氣のために左様な幻覺を感じて居られるのでせう。マノーヂニヤガンダルブ（樂）の聲も聞かては居ないぢやありませんか。そしてエンゼルのお姿も決して見にませぬよ。確りなさいませ。聽て姉妹二人が歸つて参りますから」

鬼國別は女房の聲が耳に這入らぬと見かて、尙も言葉をつゞけ、

鬼國「何とまあ美しい花だこと、もしエンゼル様、之はダリヤの花でムいますか。エ、

桃の花、こんな大きな桃の花が、さうして又咲いたのでせう、何と仰有います。第一天國の桃林の桃の花、へー、美しいものでムいますなア。私、それへ参るのですか。いや有難うムいます」

姫「もし三千彦の先生様、さうでムいませうか。到底主人の生命は駄目でムいませうな。せめてデピスやケリナの歸つて来る迄、何と申して命をとり止めて頂き度いものです」

三千「お喜びなさいませ。決して幻覺でも何でもありません。貴方の目には分らぬか知りませんが、あの通りチャンドラ、デーワブトラ様やスーラヤ様がエンゼルとなつて天國に救ふべくお見かになつて居ます。今お願を致しますから、親娘對面が濟む迄、天國行の猶豫を願ひませう」

三千彦は柏手をうち、天の數歌を謳ひ祈願を寵めた。月天子、日天子兩エンゼルは三千彦の乞を容れ、四邊に芳香を投げ、微妙の音楽につれて、一先づ天上に歸り玉ふた。殆んぞ歸幽して居た鬼國別は再び正氣になり、目を靜かに開ひて四邊を打眺め、鬼國「ア、女房、そこに居たか。貴方は三千彦様、ア、大變な美しいエンゼル様に結構な處へ導かれて行く所だつた。娘は未だ歸つて來ぬかな」

姫「ハイ、未だ歸りませぬが、聽て神様のお蔭で無事な顔を見せるでういませう。御安心下さいませ」

と自分も二人の姉妹の事を案じ乍ら故意に氣樂さうに云つてゐる。鬼國別は「會ひ度いものだな」と頻りに憧れ乍らスヤ／＼と眠りに就いた。此時節の周圍に當つて老若男女の叫び聲が聞えて來た。鬼國姫は夫の看護に手が放されないので、ソファアの側ら

に看護婦と共に附切つて居る。オールスチンは三千彦と共に玄關口に現はれ見れば赤鉢巻に赤袴の荒くれ男、酒に酔ひ潰れてヒヨロ／＼し乍ら雪崩の如く押駈け來り、矢場にオールスチンを突飛ばし、其上をドカ／＼と踏みにじり、三千彦を寄つて集つて手をとり、足をとり、凱歌を擧げてドン／＼／＼とテルモン山の山奥指して、數十人の荒男がワツショ／＼と掛聲諸共運び行く。オールスチンの伴ワックスは、驢馬に跨り群集を指揮し乍ら采配を振つて居る。目的物の三千彦は漸く攫はれた。ワックスは先づ一安心と玄關口に進入し見れば、父のオールスチンが人事不省になつて倒れてゐる。矢場に兩眼に目隠しを施し、水を吹かけ氣つけを飲ませ、漸くにして蘇生せしめた。兩眼を布で括つて置いたのは父にワックスの姿を覺られぬための用意であつた。流石惡人のワックスも父の危難を見ては救はずには居れなかつたからである。ワックスは三千彦を悪友

のエキス、ヘルマンに命じ山奥に拉し去らしめ、冷たい岩窟の中に押込めて置いた。

ワックス、「サア、之からデビス姫を生捕せねばならぬ、さりとて何とか群集を誑さねば此目的は達し得ない」

三再び驢馬を引返し十字街頭に立ち、豆太鼓を叩き乍ら、又もや辻説法を初め出したワックス「宮町の老若男女諸君よ。諸君の盡力によつてテルモン山の神館に禍する三五教の悪宣傳使三千彦を漸くの事に生捕りました。彼奴は館の總様デビス姫と密かに牒し合せ此神館を横領し、あらゆる魔法を使つて町民諸氏を苦しめる準備を致して居りましたぞ。此度鬼國別様の御病氣も全く三千彦がなす業、大恩ある生神様の御恩を報ずるは今此時でゐる。何程デビス姫が大切なお嬢さんとは云へ、バラモン教の教敵なる三五教の悪宣傳使と情を通じ、父のお館を占領し、町民を苦めんと致さ

る、以上は、一時改心が出来るまでは吾々の手に預つて、お館に歸さない様にせなくてはなりません。今の心で館へ歸られては大變でゐるぞ。如意寶珠のお館の寶も三千彦と兩人牒し合せ奪ひ取つたに相違いませぬ。それで皆さんの力のかつて、デビス姫が今ここに歸り来らば、有無を云はせず、テルモン山の岩窟に連れ行く事に致しませう。之は決してワックスの私言では無いませぬ。館の鬼國姫の御命令でゐますぞ。皆さん、宜しく頼みます」

と嘯鳴りつけた。熱しきつたる群集は馬鹿息子のワックスが言葉を、さまで信用するものはないが、群集心理と云ふものは不思議なもので、三千彦を捕虜とした勢に乗じ、一も二も無くワックスの言葉を鵜呑みにし、第二の計畫としてデビス姫を捕縛せんと宮町を後に郊外まで駆け出した。

折から大原野の中央を宣傳歌を歌ひ乍ら、男女四人連れ此方に向つて進み來るものがあつた。

「神が表に現はれて

善神邪神を立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直せ

三五教の宣傳使

治國別に助けられ

バラモン教のカーネルと

仕へ侍りし此エミシ

現實界の慾を棄て

一切萬事神界に

身も魂も任せつゝ

比丘の姿と相成りて

山川渡り野路を越ね

神の教を遠近に

宣り傳へ行く折もあれ

エルシナ川の激流に

陥み漂ふ人々を

命を的に救ひ上げ

撿め見ればこは如何に

バラモン教に仕へたる

ベル、ヘル、シャルの軍人

ケリナの姫の四人連れ

やうく三人の命をば

取り返しつゝ、川岸を

傳ふて來たる草野原

ベルとヘルとの兩人は

俄に惡心萌芽して

吾等二人の命をば

奪らんとしたる淺間しさ

月照彦の神力に

照らされ惡魔は忽ちに

雲を霞と逃けて行く

後に二人は勇み立ち

月の光を身に浴びて

露野を涉り進む折

道の傍の方岩に

俄に唸く人の聲

はて訝かしと窺へば

デビスの姫やベル、ヘルの

三人の男女と知るよりも

二度ビツクリの二人連れ

種々雑多と介抱して

三人の命を相救ひ

喜ぶ間もなくベルの奴

デビスの姫の身につけし

七寶悉く掠奪し

草野に姿を隠しける

ア、如何にせん曲神に

呪はれきつた盗人の

如何に誠を説くとも

悟る術なき憐れさよ

手負ひ玉ひしデビス姫

ヘルの背中に負はせつ、

テルモン山の神館

目當に進む野路の上

守らせ玉へ惟神

神の御前に願ぎ奉る

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは直り直せ

神は吾等と共にあり

如何なる曲の攻め來とも

誠一つの大道に

さやる術なき曲津神

一日も早く魂を

洗ひ清めて大神の

誠の道に歸れかし

ア、惟神 々々

御靈幸はひましませよ」

ヘルはデビス姫を背に負ひ乍ら息も苦しげに一歩々々拍子をとつて歌ひ出した。

ヘル「ウントコドッコイドッコイシヨ 惡の酬ひは目のあたり

バラモン軍の解散と 同時に心倭け出し

忽ち魔道に逆轉し 覆面頭巾の怪装で

旅人を掠め 懷の 寶を奪ふ追剝と

一度はなりし果敢なさよ ベルとシャルとの惡友に

唆かされて忽ちに 思ひもよらぬ泥坊の

仲間となりて行く人の 衣を脱がせ金を奪り

擧句の果は命まで 奪りて露命を繋ぎつゝ

エルシナ川の袂まで 忍びくゝに來て見れば

ザンブと立ちし水煙 如何なる人の投身ぞや

命を助けにやなるまいと

跳び込み二人を救ひ出し

つまらぬ事を争ひつ

魂は中空に跳び出して

闇に迷へる時もある

高姫館の危難をば

再び此世の人となり

居士の御後に従ひて

來かゝる折しも一萬兩

心の鬼は忽ちに

身を躍らして深淵に

又もやベルの惡人と

再び淵に轉落し

入衢街道の旅をなし

忽ち聞ゆる注螺の聲

求道居士に救はれて

神の恵みを喜びつ

エルシナ谷の山口に

所持し玉ふと聞くよりも

角振り立て、狂ひ出し

ベルと二人が牒し合ひ

奪はんものと四苦八苦

命からく山を越へ

怪しき姿に驚きつ

怪しの姿は灌壺を

木の間に潜り歸り行く

光眩き寶石は

輝きわたる人の顔

俺につゞけと云ひ乍ら

暗き谷間を潜り抜け

如何にもなして此金を

遂には神に嚇され

不動の瀧に逃げ行きて

慄ひ戦く折もあれ

上りてトボく山阪を

木の間に洩る、月影に

星の如くにピカ／＼と

これ見逃してなるものか

ベルは一步前に立ち

月の白みし山口の

草茫々と生ね茂る

巖の側に來て見れば

上に安坐し月光に

隙を覗ひベルの奴

光を狙つてムシらんと

ズドンと許り二三間

之を見るよりウントコシヨ

枯木杭を拾ひ上げ

骨も挫けと女をば

キヤッとい聲断末魔

中に目立ちていと廣き

以前の女は方岩の

向つて何か祈り居る

猿臂を伸ばして寶玉の

飛びかゝりたる一刹那

投げ出されたる淺間しさ

四邊に白く光りたる

無性矢鱈にウントコシヨ

目あてにウンと打下ろす

やれ安心と胸を撫で

ベルに水をば與へつゝ

漸く息を吹き返し

一悶錯をおツ初め

露おく草に倒れけり

教の道の求道居士

現はれまして吾々の

こゝに心をこり直し

デビスの姫を背に負ひ

テルモン山の神館

お詫び 旁進み行く

種々雑多に介抱して

又もや寶の奪合ひに

二人は息も絶々々に

かゝる處へ三五の

ケリナの姫と諸共に

命を救ひ玉ひてゆ

罪亡ほしの其爲めに

重たき足を引摺りつ

鬼國別の御前に

吾身の上ぞ果敢なけれ

ア、惟神々々

ヘルが犯せし罪科を

生きては神の御用に立ち

清き生涯送るべく

天地を統ぶる大神の

と歌ひ乍らテルモン山の中腹、宮町を指して、爪先上りの原野を歸り來る。種々雑多

の旗を立てた宮町の老若男女は、ワックスを隊長とし、デビス姫を兎も角、生捕らん

もの町内隈なく探し、遂には郊外にまで現はれて來た。求道居士一行は、そんな變

事が起つてゐることは夢にも知らず、悠々として宣傳歌を歌ひ乍ら、道の傍のバインの

森に少時息を休めて居た。群集の喊聲は時々刻々に高まり來る。

御慶幸はひましまして

一日も早く赦しまし

死しては尊き天國の

守らせ玉へ惟神

御前に畏み祈ぎまつる」

(大正一二、三、二四、舊二、八、於地生温泉浴屋、北村隆光録)

瑞月

夕日落ちて潜客晩來猫の家

灯燈を股につるして夜這かな

臘燭が立てば灯燈皺が伸び

法戒を築いて王仁は安息し

春の夕野渡る風の微笑かな

第三章 野

探 (一四五三)

求道居士はデビス、ケリナをバインの森迄送り來り、ヘルミ共に少時息を休めて居た。忽ち老若男女の鬨の聲、鉦や大鼓を鳴らし乍ら。

「返せ戻せ、三五教の惡神よ ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン 大事の〜お姫さん

テルモン館のお姫さん ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン 不動の瀧へ引き込んで

惡逆無道の三千彦を お先へ館へ忍ばせつ

金剛不壞の如意寶珠 大事の〜お寶を

野 探

隠した奴は三千彦だ

返せ戻せ如意寶珠

ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン

如意の寶珠はバラモンの

神のお蔭で返つたが

肝腎要のお姫さん

返せ戻せやサア早う

三五教の宣傳使

如何なる魔法を使ふとも

此方にや此方の魔法がある

返せ戻せサア早く

大事の〜お姫さん

も一つ大事なケリナ姫

三年前に館をば

お出ましたなつたそれ限り

根つから歸つてムらない

ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン これも矢張り三五の

悪神共のなす業と

ワックス司の御託宣

よもや間違ひムるまい

ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン エーエーエ

さても此度テルモン館

俄に悪魔が到来し

肝腎要の如意寶珠

盗んで次にお姫さん

喰へて行なうと企みつつ

まづ手初めに教主さん

鬼國別の命をば

所在魔法を使ひつつ

命を取らうと企み居る

こうなりや館の損でない

宮町中の大損だ

テルモン山の中腹に

泰平の夢を貪りし

天下唯一のバラダイス

三五教の鬼が来て

水も漏らさぬ悪企み

根本的に看破した

ワックスさんは偉いもの

テルモン爺の救世主

宮町中の助け神

悪いお方も聞てたに

古今無双の神力を

現はしなさつた偉い人

讚よ稱へよ崇めよ拜め

讚よ稱へよ崇めよ拜め

ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ〜チャンチキチン

パインの森には何となく

怪しい人の影がある

これも矢張り三五の

悪神共の襲来か

デビス、ケリナの姫さんの

我々町人一同は

一度もお顔は拜まねぞ

御容色の勝れた人ぢやけな

皆さん確りなされませ

三五教を守護する

高倉、旭の明神が

女に化けてテルモンの

爺へ侵入すると云ふ

大國彦の神様の

さしも厳しき御託宣

ワックスさんに降りしと

聞いて我等はうか〜と

無事泰平の夢を見て

これが暮して居られうか

何程姫に見わたして

決して信じちやなりません

ワックスさんの云ふ通り

一旦女を見つけたら

とつ捉まわてワックスの

お目にかけた上でなくば

決して爺へ送るなよ

ドンドコ〜ドコドコドン

チャンチキ／＼チャンチキチン

と、赤禪赤鉢巻に、白い旗に文字をムシ／＼と書いたのを立て乍ら、黒い顔した老若男女が坂道を下つて来る。斯の如く町民一同が脱線の蠢動を初めたのは、ワックスがいつも使役して居る悪狐の所爲である。この悪狐は妖幻坊の部下であつて三九坊と稱ふる、數千年の劫を経た古狐で、時々テルモン山に夜中數千の火を點し、或は文字をもつて大の字を現はしなきて、町民を胡麻化して居たのである。此三九坊はワックスの体内を出入して何時も好からぬ事を計畫して居た。其處へ三五教の三千彦が突然やつて來たので、自分の正体の現はれん事を恐れ、三千彦を排斥し、三五教の宣傳使を一人も窺はしめざるやう爲すは今此時と、有らん限りの力を盡し、先づ第一に町民の精神を擾亂すべく、ワックスの口を借つて辻演説を初めたものである。百戸許りの町民

は、ワックスの妖言を一も二もなく信じて仕舞ひ、家を空にして姫の搜索に出掛けたのである。この家も／＼家を空にして外へ飛び出し、猫の子一匹留守をして居なかつた。其間に、オークス、ビルマの兩人はワックスの内命により、留守の家々を探つて目ほしい物品を残らず盗み出し、テルモン山のある岩窟へ運ばせて置いた。百戸が百戸とも最も大切な物品を一つも盗まれない家は無かつた。ワックスは數多の人々を引き連れ乍ら、四人の休息せるバインの森に押し寄せ來り、大音聲

ワックス「ヤア／＼それなる、圓頂縮衣の比丘共、汝は三五教の魔法を使ひ、二人の姫様をいづくにか、奪い取り隠し置き、旭、高倉の白狐を使ひ、デビス姫、ケリナ姫に化けさせ、再び如意寶珠の寶を手に入れんとして進み來りし大悪人奴、又一人は一ヶ月以前三人抜刀をもつて宮町を荒した大泥坊の中の片割、隠しても隠されまい

サアさうぢや、尋常に縛につけ」

と嘯鳴り立てた。求道居士は言葉柔しく

求道「拙者は決して悪神ではムらぬ、元はバラモン教のカーネル、エミシと申すもの、大黒主様の命を奉じ、鬼舂別、久米彦兩將軍に従ひ、齋苑の館へ進軍の途中、三五教の宣傳使迦葉尊者、治國別に出遇ひ誠の道を説き示され、比丘となつたもので、さうして此御兩人はテルモン館の、デビス姫様、ケリナ姫様でムるぞ。危急の場合をお助け申し、此處迄お送り申たものでムる。サア疑を晴らして我々一同を御案内召され」

ワックス「アハ、、、。吐したりな糞坊主奴、怪辯をもつて神力無双の某を胡麻化さんと致すとも、左様な事に誑かからる、如き某ではムらんぞ。デビス姫様は決して

てそのやうなお耳はしてムらぬ。全く高倉と申す悪狐でムらう、化損ねて犬に耳を噛れた證據にはまだ血が滴つて居るぢやないか。もう一人のケリナ姫に化けた奴狐も首筋に創を致して居るぢやないか、其方も亦耳の邊りに創の跡がある。きつと犬に噛まれて、化けて此處迄来よつたに違ひない。サア皆の者猶豫はいらぬ、ワックスの命だ。縛りあげて、姫の所在を白状させる爲め、テルモン山の岩窟に送つたがよからう」

デビス「これお前は家令の悴、野呂作のワックスぢやないか、何と云ふ失禮な事を云ふのだ。妾の命を助けて下さつた御恩人、無禮の事を致す了見は致しませぬぞ」

ケリナ「ヤア珍らしやワックス殿、其方は相變らず脱線を續ける男だな。我等姉妹は鬼國別の娘に間違ひない程にサア早く其處を逃いてお呉れ、お父上の御身の上が氣に

か、るから、一時も早く歸らねばなりません」

ワックス「ツベコベと我々を胡麻化さんと致しても其手に乗るものではない。サア皆さん、あの耳を噛まれて居るのが四足の證據だ。早く縛りなさい」

と下知すれば數十人の荒男は有無を云はせず四人を雁字搦に縛り上げた。求道居士初め其外三人は名もなき小童共にムザ／＼縛られるやうな者では無かつたが、一層の事縛られて館へ歸り、ワックス其外を驚かしてやらうと、態々に縛に就いたのである。然るにワックスは胸に一物ある事とて、三九坊の副守の命する儘に三十彦を放り込んだ向ひ側の谷間の岩窟に一人宛分けて、大勢と共に送り込み錠を堅く鎖して仕舞つたのである。

町民は勝鬨を上げて各家路に歸り見れば、バラモン神を祭る最も必要な金銀製の

香爐や水壺が、一個も残らず紛失して居た。何れも周章狼狽街路に出て、互に盜難の次第を物語つて居る。其處へ意氣揚々として驢馬に跨りやつて来たのは、ワックス、オークス、ビルマの三人であつた。一同は三人の周圍に群がり來り、盜難の次第を訴へた。オークスは馬上より大音聲を發して云ふ、

オークス「三五教の惡宣傳使、テルモン山の館へ忍び込み、デビス姫をチヨロまかし、如意寶珠を隠し、鬼國別を呪咀して命を取り尙ほ是にても飽き足らず、宮町の家々の重寶、バラモン神を祭る重要な器具を一つも残さず奪い取りしは、全く彼等の魔法の致す所、決して油斷をするな。グズ／＼して居ると大切な娘を取られ、財産一奪はれ、遂には皆さんの命迄取られますよ。最早テルモンの神館は、鬼國別様は九死一生の場合、とてもお命は難い。加ふるに二人のお娘は魔法使の爲に行方

は分らず、到底安心して暮す事は出来ずまい。又肝腎要の如意寶珠を失ふた上はハルナの都に坐ます大黒主様の怒に觸れ、村中追放に遇ふか、或は塵殺に遇はねばならぬ所をこのワックス様が、御神力によつて如意寶珠を手に入れて下さつた爲め、宮町百戸の罪は逃れたと申すもの、されば今後はワックス様を館の主と崇め奉り、本當のデビス姫様が見つかつた上で御夫婦にお成り下さるやう、御兩人に村中がお勧め申し、そして祖先より傳はつた家を守らうでは無いませんか。ワックス様は今日迄は故意に馬鹿になり、放蕩息子と見せかけて、此國難をお救ひ下さつた誠の救世主でムいますぞや」

と嘘を甘く並べ立て、説きつけた。集まり來りし老若男女は、何れも三五教の惡神の魔法にかかつて苦しむ事を恨み、且つワックスの神力を賞揚し、

「ワックス萬歳」

を三唱し乍ら各家路に急ぎ歸る。歸つて見れば先祖代々から傳はつた財物の祭具が無いので又もや憂ひ沈み、益々三五教の宣傳使を憎み、その反對にワックスを神の如くに尊敬するに至つた。

(大正一二、三、二四、舊二、八、於伯耆國皆生溫泉濱屋、加藤明子録)

瑞 月

川の邊に小鳥の影も流る春
物をいふ他の花香に花見かな
谿流もいと清瀧の舟あそび

第四章 妖

子（一四五四）

館の家令、オールスチンは老齡衰弱の身を大勢の荒男に所構はず踏み倒され、ワックスの介抱に依りて再び息は吹き返したものの、苦しみに堪えず、我館に昇つぎ込まれ、發熱甚だしく、日夜苦悶を續けて居た。

一方館に於ては鬼國別は假死状態に陥り、囁言許り云ふて居る。さうしてデピス、ケリナの兩女は行衛は容易に分らず、又力と頼む三千彦の行衛も分らなくなり、鬼國姫は悲痛の淵に沈み、身をワナ／＼と慄はせ乍ら、世を果敢なみ、生たる心地はせなかつた。されど如何にもして一時なりとも夫の病を長引せ二人の娘に合せたきものと、夫のみ力に日を送つて居た。館の中はオークス、ビルマの兩人が萬事切り廻して居る

受付のエルは牛に糞丸を潰されたきり、綿屋の奥の間で高枕をして苦しんで居る。鬼國姫はオークス、ビルマを居間に招き、種々相談をかけた。二人は時節到来、ワックスの思惑を成就させ、甘い汁を吸はんものと胸を躍らせながら、素知らぬ顔して心配氣に俯向いて居る。

姫「オークス、お前に折り入つて相談したい事がある。旦那様はあの通り何時お歸幽なさるか知れぬ御容態、又家令のオールスチンは重病で苦しんで居るなり、ワックスは旦那様や、オールスチンの病氣平癒のために荒行に行く云つて出たきり顔を見せないし、二人の娘は未だ歸つて來ず、若も事が有つたら、如何したら好からうか、お前も一つ考へて貰ひ度いものだがなア」

オークス「誠にお氣の毒な事が出來たものでムいますワイ。お館許りの難儀ではなく

宮町一統の難儀でムいます。貴女はバラモン教の館を守護する役であり乍ら、素性の分らぬ三五教の魔法使を町民に内証で引き入れなされたものですから、此様な惨い目に會はされたのです。これからは些々我々の云ふ事も聞いて貰はなくはなりません。町中の噂によれば、あの三千彦と云ふ奴は、三五教切つての魔法使で、お館に最も大切な如意寶珠の玉を忍術をもつて奪ひ取り、お館に有るにあらぬ心配をかけて置き、進退維谷まる場合を考へ澄まし、バラモン教の宣傳使に化けて這入つて來よつたのでムいます。夫故今迄、家にムつた、デビス姫様迄お行方は分らぬやうになり、此町中は大切な御神具を残らず盗まれ、大變な大騒動でムいます。こんな事が町民に分らうものなら、夫こそ貴女の御身の大事、大きな顔して此お館には居られませんまい。そつと早馬でハルナの都に報告でもせうものなら、旦那様は病氣で亡く

なられたとした所で、お前さんは逆磔刑にあはされるでせう。大變な事をして下さつた。私は貴女の境遇に御同情をするに共に、貴女の御所置を恨んで居ます。もし斯んな事が大黒主様のお耳に入らうものなら、我々もどんな刑罰に會はされるかも知れません。今後はちつとオークスの云ふ事も聞いて貰ひ度いものです」

姫「あの三千彦さんに限つてそんな惡黨な方では有りませんが、夫は何かの間違ひでせう。金剛不壞の如意寶珠を隠したのは決して三千彦さんぢやない、家令の伴のワックスに間違ひないのだ。あれが我娘デビス姫を無理往生に墜らんとして種々どエキス、ヘルマンなきを使ひ企んだと云ふ事は明瞭り分つて居るのだよ。勿体ない、誠の宣傳使にそんな罪を被せるものぢやありません」

オークス「奥様、夫が第一貴女のお考へ違ひです。ワックスさんは何を云ふても家令の

倅、このお館が立ち行かねば自分の家も立ち行かないのですから、よう考へて御覽なさい、そんな不利益の事をなさいますか。そこが三五教の魔法使の甘い所で……ワックスさんは人がよいから、塗りつけられたのですよ。奥の奥を考へて貰はねば誠にワックスさんに氣の毒でムいますわ。よく考へて御覽なさいませ。三千彦と云ふ魔法使は、町民の関の聲に驚かされて雲を霞と逃げ失せ、旦那様はさう最負目に見ても御養生は叶ひますまい。そして家令のオールステンさんも御本復は難いこの場合、此館のお力になる者は誰だと思召す。ワックスさんより外無いぢやありませんか。貴女はワックスさんをお疑ひなさると、これ程人氣の有るワックスさんの爲に町民が承知致しませんぞ。よく胸に手を當てお考へにならないと、お館の一大事でムいます」

姫 「ハテ合點のゆかね事だなア、ビルマ其方は何と思ふか」

ビルマ 「ハイ私は町内の噂を調べて見ましたが、ワックスさんは本當に偉い人ですよ。三五教の魔法使が隠して置いた如意寶珠をも、甘く自分が罪を負ふと云ふて吐き出させなされたのでムいます。眞實の忠臣義士と云ふのは、あのワックスさんでムいます。あの寶が無かつたらお館は勿論、宮町一同が大黒主様から所刑に遇はねばならぬ所を助けて下さつたのだから、テルモン國の救世主だと云つて居ます。さうしてもデビス姫様の御養子になさつて此國を治めねば町民が承知しません。私は別にワックスさんがお世繼にならうと成るまいと利害關係は無いのですから、ワックスさんの爲に辯護は致しません。中立地帯に身を置いて、自分の所信を包まず隠さず申上げます」

姫「町民迄がさう信じて居る以上は、さうも仕方がない。兎も角今日の都合、養子にするせんは後の事として、一度ワックスさんに來て貰ひ度いものだなア」

オークス「それは結構でムいますが、ワックスさんは神様の爲め、お館の爲、町民の爲め、命がけの業をするに云ふて出かけられましたから、お行衛が分らず、何時歸らるゝとも見當が付きません。就ては家事萬端を處理する役員が無ければ不都合でムいませう。家令はあの通り胸板を踏まれ、回復の見込は立ちません、二人の姫様は行方分らず、日那様は御重病、誰か家令を新にお命じなさらなくては、一日も館の事務が取れますまい。私も門番位勤めて居つては大奥の御用は出来ませんしなア」

姫「ア、そんなら、順々に拔擢してお世話にならう。受付のエルを臨時家令となし、お前は受付になつて貰はう、さうすれば萬事萬端都合よく運ぶであらう」

オークス「成程それは順當で至極結構でせう。併し乍ら、エルさんの慌者、日那様が、まだ命のある中から御歸幽になつたと云ふて町中を觸れ歩き、大勢を騒がし、お負に牛の尻に突き當り翠丸を踏み潰され、綿屋の離室に有らん限りの苦しみをして居ります。さうして道端に繋いであるあれ程大きな牛が目につかないやうな事では門番も出来ないに云ふて、町中の笑はれ者になつて居りますよ。あんな慌者が家令にでもならうものなら、お館の威勢は申すに及ばず、神様の御威勢迄も落ちると云つて、町中の大反對でムいます。夫はおよしになつた方がお爲でムいませう」

姫「ハテ困つた事だなア。そんならワックスが歸つて來たら、暫し親父の代理を勤めさす事に致しませう。夫迄お前は臨時家令の役をやつて貰ひ度い」

オークス「私のやうな不都合な者は、到底臨時家令のやうな事は出来ません。平にお断

り申ます、却てお館の不都合な事を仕出かすといけませんから。總て臨時と云ふものは水臭い文字で、本氣にお館の爲に盡すと云ふ氣が出て來ませぬわ」

ビルマ「一層の事、ドツと張り込んで、オークスさんを家令に任命なさつたらさうでせう、キツとそれ丈の腕前はムいますよ。貴女は奥に許りムるから外の事情は分りますまいが、私が証明致します。町民一同の希望はワックス様を御養子となし、オークスさんを家令と遊ばし、さうして〇〇を家扶にお命じになれば、お嬢様も歸られお妹御のケリナさんも無事歸られると云ふ噂でムいます。世間の噂と云ふものは餘り馬鹿にならぬものでムいますよ。神様の爲め、お館の爲め、それが最善の方法と私は考へます」

姫「〇〇を家扶にせいとは誰の事だい、もつと明瞭りと云ふて貰はなくては分らんぢ

やないか」

ビルマ「へい、到底申上げた所で門番位が家扶には成れますまい。云はんが花でムいませう」

姫「ホ、、、、ビルマさん、自分を推薦して居るのだらう。お前も抜目の無い男だなア」

ビルマ「此頃の世の中は盲人許りでムいますから、自分から自分の技能を發表しなくては、何時になつても金槌の河流れ、榮達の道はつきません。正真正銘のネットブライスの技量を放り出して、それをお認めになる御器量があればよし、無ければ時節到らぬと覺悟するより外はムいませぬ。私を御採用なればオークスだつて決して家令の職に置きませぬ。此男も今度の事件については、チと弱點、……いや弱點は

無いのです。貴女がそつと魔法使を引き入れなかつたのが弱點ですから、我々二人が揉み消し運動をやつたので、町内の騒ぎがやつと治まつたのでムいますからなア」

姫「そんなら仕方ありません。お前さんを臨時家扶に命じませう」

ビルマ「もし奥様、臨時家扶と云ふのは釜焚きとは違ひますよ。家令の次の職、重職でムいますよ。念の爲め一寸申上げて置きます」

姫「門番が火夫に出世したら結構ぢやないか。此館は大黒主様の命令で家令一人と定つて居るが、家扶を置く事は出来ないのだから、氣の毒乍らお前さんは門番頭で辛抱して下さい」

かゝる所へ一人の看護婦が慌たどしく入り來り、

看護婦「奥様早く來て下さいませ、旦那様の御臨終と見なしまして、大變御様子が變つて

參りました」

と心配さうに云ふ、鬼國姫は胸を撫でながら慌たどしく主人の病室に駆けり行く。オックスはビルマと共に鬼國姫の後に従ひ、病室に入る。鬼國別は俄にムクムクと起き上り、瘦こけた顔の窪んだ目を光らせ乍ら、

鬼國「女房お前は何處に行つて居た。最前から大變待ち兼ねて居たぞよ、さうして二人の娘はまだ歸つて來んか」

姫「ハイもう聽て歸るでムいませう。まだ何とも便りがムいません」

鬼國「ハテ困つた事だなア、此世ではもう娘に遇ふ事が出來んのかなア。エ、殘念ぢや」

姫「旦那様、何卒氣を落さないやうにして下さい、屹度神様のお蔭で會はして下さいさる

でせう」

鬼國「三千彦の宣傳使様や家令は何處へ行つたかなア、早く會いたいものだ」

姫「三千彦様は俄にお行衛が分らぬやうになりました。屹度娘二人を迎ひに行つて下さつたのでせう」

鬼國「ウン夫れは御苦勞だなア。屹度會はして下さるだらう。家令のオールスチンはまだ來んか、何をして居るのだらう」

姫「ハイ、一寸用がムいますので、つい遅れて居ます。やがて參るでムいませう」

オークス「もし旦那様、家令のオールスチンは町民に胸板を踏み折られ、九死一生の苦しみを受けて館に歸つて居られます。そして町中は三五教の魔法使をお館へお入れなさつたと云ふて、鼎の沸くやうな騒ぎでムいます。そこを私等二人が鎮定致し、今

奥様と御相談の上、私がたつた今家令となりましたから、何分宜敷くお願い申します
今後は粉骨碎身、十二分の成績を擧げてお目にかけますから御安心下さいませ」

鬼國「お前は門番のオークスぢやないか。何程人望があると云つても、さう一足飛びに門番が家令になると云ふ譯には往くまい。奥、お前はそんな事を許したのか」

姫「ハイ、……イ、エ」

ともじくして居る。

鬼國「家令を任命するには何うしてもオールスチンの承諾を得、彼が辭表を出した上でハルナの都に伺ひを立て、其上でなくてはならぬ。さう勝手に定める譯にはいけぬこの館は特別だから何事も大黒主様に伺はねばならぬ。よもや眞實ではあるまい。奥、お前は當座の冗談を云ふたのであらう」

鬼國姫はモヂ／＼しながら、幽かな聲で「ハイ」と一言、俯向いて居る。

オークス「苟くも館の主人の奥様とも在らう方が、冗談を仰有らう筈はありますまい。奥様のお言葉は金鐵よりも重いものと信じて居ります。何と仰有つてもオークスは當家の家令でムいきます。萬事萬端館の事務を取り調べハルナの都に報告を致さねばなりません。何處迄も此オークスを排斥なさるならば、三五教の魔法使をお館へお入れなさつた事を大黒主様に注進致しませうか、それでも苦しいはムいませんか」

と命旦夕に迫つて居るのをつけ込んで無理やりに頑張つて居る極悪無道の曲者である鬼國「これ奥、私はお前の見る通り、今度はどうも本復せないやうだ。何うか一時も早く三千彦さんを尋ね出し、此館のお力になつて頂け。あの御神力をもつて守つて頂ければ、如何に大黒主の神、數萬の軍勢をもつて攻め寄せ來るとも恐る、事は要らぬ

かやうな悪人を決して我死後用ひてはならぬ。今日から門番を免職して呉れ。エ、穢らはしい」

と衰弱の身心に怒氣を含み、嗚咽り立てた。それつきり又もやグタリと弱り、忽ち昏酔状態に陥つた。

鬼國姫は、身も世もあらぬ悲しみに浸されながら、故意とに涙を隠し形を改め、兩人に向ひ、

姫「オークス、ビルマの兩人、其方は御主人様の命令だから、氣の毒乍ら唯今限り此館を歸つて下さい。假令どうならうとも其方のやうな傲慢無禮な僕に厄介にならうとは思はないから、……若し日那樣何卒御安心下さいませ」

と耳に口を寄せて聲を限りに涙交りに述べ立てた。鬼國別は幽かにこの聲が耳に入つ

たに見え、力無けにニタリと笑ふ。オークスは横柄面を曝し乍ら、威猛高になり、オークス「もし奥様、旦那様は大病に悩み耄けて居らつしやいます。決して仰有る事は真ぢやありません。熱に浮されたお言葉、左様な事を本當になさるやうでは此お館は大騒動が起りますよ。今日此お館を双肩に擔うて立つものは、ワックスや我々二人の外に誰がありませんか、好くお考へなされませ。門番は家令になれないと仰有りましたが、何と云ふ階級的の考へに捉はれて居らつしやるのですか。昔常世城の門番は、直ちに拔擢されて右守の神になつたぢやありませんか。それも失敗の結果でせう。我々はお館の危急を救つた殊勳者です。もしお氣に入らねば仕方はありません、我々是我々として一つの考へがムいませ。後で後悔なさいませなよ。町民一般が大切な寶を盗まれたのも、皆三千彦の魔法使によつて大勢の者が難儀をして

居るのでムいませ。云はゞ三千彦は町民の敵でムいませ。其敵を何時迄もお構ひなさるのならば、矢張貴方方御夫婦は國敵と認めませ。大黒主のお開きなされた此靈場を、みすく三五教の奴に蹂躪せられるとは、町民一般の忍び難い所でせう。私を家令にお使ひなさらぬなら、たつては頼みませぬ。此始末を町民に報告致しますさうすれば町民は貴方方をバラモン教の仇、神様の敵として押し寄せて参ります。お覺悟なさいませ」

と云ひ放ち勢鋭く表へ駆け出す。翠丸を牛に踏み潰され、綿屋の離室に養生して居たエルは漸う二三人の小供に送られて玄關に歸つて來た。オークス、ビルマの二人は玄關にてふと出會つた。エルは二人の相好の唯事ならぬに不審を起し、

エル「オイ、兩人、血相變へて何處へ行くのだ。是には何か様子があるであらう、先づ

俺に聞かして呉れ。何にか仲裁してやるから」

オークス、ビルマの兩人は脅迫的に茲迄來たのだが、迂つかり町民に妙な事を喋つて、後の取纏めに困つてはならぬと思つて居た矢先、エルに止められたので、これ幸と二人は受付にドッカと坐し、密々話に耽つて居る。

(大正二二、三、二四、舊二、八、於皆生温泉濱屋、加藤明子録)

瑞 月

花よりも團子と皆が食道樂

汽笛をばきいてかけ出す驛の前

第五章 糞

闘 (一四五五)

館の受付の溜りにはエル、オークス、ビルマの三人、机を真中に置いて胡坐をかき虫のよい夢を見て、互に泡沫の如き出世譚を争ふて居る。

エル「おい、オークス、貴様は門番の癖にドカノと受付の關所を突破して奥の間へ進入して行つたと見ゆるが、餘程奥様からお目玉を喰つたと見ね、随分面を膨らしてゐるじやないか。俺は梟の化物と思つたよ」

オークス「ヘン、門番々々て、偉相に云ふない。翠丸潰しの大將奴、俺は今迄の門番オークスとはチと違ふのだ。これから此館の家令職となり、奥住ひとなつてオクスイ、勤めをするのだから、何事も此方の吩咐に服従するのだぞ。なあビルマ、お前がよ

く知つてるだらう」

ピルマ 「さうだな。まあ、夢の中の家令位なものだらうかい。こんな處で、かいい、これ云ふて居る三人に聞かれて、さア今と云ふ時に總ての計劃が畫餅に歸するかも知れないぞ。成功する人は黙つて居るよ。黙つて居る人が夜光の玉を盗ると云つてな何でもガラ／＼云ふものじゃない。沈黙が一等だ」

オークス 「馬鹿云ふな。已に／＼奥様から證言を得て居るのだ。誰が何と云つてもワックスさんを此館の主人となし、デビス姫様と芽出度く合衾の式を擧げさせ、此オークスが家令職となり、妹のケリナ姫が聽て歸らるゝと云ふ事だから、ケリナ姫の夫となり、教務、政務を刷新し、綱紀を振肅し、泰西の世を來たすのだ。今迄のやうな老耄や、狼狽者の畢丸潰しの受付では駄目だからな。エッへ、、、」

エル 「イツヒ、、、アイタ、、、餘りせうもない事を吐すので、可笑しうて畢丸に響いて、畢丸が痛くて碌に笑ふことも出来やせないわ。貴様目が永いので、そんな夢でも見たのだらう。それよりも早く門番を神妙に勤めぬかい。旦那様が何時知れぬ様な御病氣が起つてるのに、ウカ／＼して居る時ぢやないぞ」

オークス 「おい、エルさん、旦那様は已に御歸幽になつたと云つて觸れて歩いたぢやないか。随分い、狼狽者だな」

エル 「定つた事だ。何でも手廻しよくして置かねば間尺に合ぬぢやないか。病人じやなくても年寄が先に死ぬのは當然だ。何時迄も旦那様が生きて居ると思へば何時アフンとせなくちやならぬか分からぬから、一寸町民の目を覺ますために布令を出し、豫行演習をやつたのだ。英雄の心事が門番に分つて堪るか。エヘン、イヒン、ア

イタ、、、さうも翠丸の奴、物云ひやがつて仕方が無いわ」

オークス 「おい、エル、ここは一つ真面目になつて聞いて呉れ。本當に俺は今日から家令職だぞ。そしてワックスさんが常節の御世繼だ。それから此ビルマが受付に坐りお前は暫らく翠丸が癒る迄お暇を賜つて休養するのだな。俺が家令になつた上は、滅多に受付より下の役はさ、んから、柔順しく控へたが宜からう」

エル 「俺は死んでも受付は止めぬのだ。何程貴様が家令になつた處で、俺の受付はハルナの都の大黒主様から、命令を受けてゐるのだから、俺の地位を到底動かす事は出来まい。そんな事云はずに門番でも神妙に勤めたが宜からうぞ」

オークス 「よし、そんなら俺が受付を免職させて見せよう。貴様は受付であり乍ら門外へ飛び出し、死んでもムらぬ旦那様をお逝れになつたに觸れ歩き、町内を騒がした

大罪人だ。これを大黒主様に上申しやうものなら、それこそ免職は宵の口、貴様の笠の臺が飛んで了ふのだ。さうだ、それでも苦しくないのか」

エル 「マ、、、待つて呉れ。それやそうぢやけれど、實の所は夢を見て居つたのだ。夢でした事は仕方がないぢやないか」

オークス 「何、夢を見たよ、貴様はさうすると怠慢の罪を免る、事は出来ない。朝から晩まで平家蟹の様に目の玉をツン出して、お役目大切に受付を守つて居らんならぬ役目であり乍ら、晝の中からサボタージユをやつて晝寢をやつて居つたのだな。益々怪しからぬ。おいビルマ、貴様が證據人だ。ここで一つ上申書を書くから、お前證據人になつて呉れ」

ビルマ 「そら、俺も證據人にならぬ事はないが、町に事勿れと云つてエルの事を上申す

るこ、それが一つの引か、りこなり、終には貴様と俺との……それ……窃盗事件が
發覺するじゃないか。ここはお互に辛抱したが宜からうぞ」

オーグス 「何、何時俺が窃盗した。馬鹿な事を云ふな」

ビルマ 「セトウと云ふのは盗人の事じゃない。去年の冬、テルモン山の谷間で雪を固
めて洞を穿ち、そこで遊んだ事があるだらう。それを雪洞と云ふのだ。それでも矢
張サボになるからう」

オーグス 「何、俺等は門番だから、立派な門を造らうと思つて、雪で雛型を作つて其下
を通つたのだから、云はゞ職務に忠實になるのだ。そんな事が何、罪にならう」
と巧く二人寄つて窃盗事件を誤魔化して了つた。

エル 「ヒ、、、アイタ、、何だか知らぬが、二人とも云ひ滑つた事を巧く塗り付け
たやうな気分がしてならぬわ。此奴ア探つて見れば何かあるに相違ない。香爐や金
銀の水壺を、あの騒ぎに皆盗んで了つたと云ふてるからにやお前等が、よもや……
ではあるまいかの」

オーグス 「馬鹿云ふな。俺は旦那様の御病氣について、門番を休んで今の今まで御
用をして居つたのだから、そんな事は些とも知らないわ。大方三五教の魔法使が持
つて去んだのだらう」

ビルマ 「おい、兩人、こんな話は止めにして、兎も角旦那様が何時お國替になるや分らぬ
なり、家令も亦何時死ぬか知れぬ場合だ。こゝで俺等は三人同盟して一つ出世の門
を開かうぢやないか。何時迄も門番や受付では面白くないからう。幸ひ年も若し
獨身者だから、家令の息子のワックスの馬鹿を此館の養子にするのは勿体ない。一

層の事、俺等三人で、此館のお世継ぎと、家令と、受付兼内事頭の三つの役を占領する事にしようぢやないか」

エル「うん、そりや面白からう。然し乍ら奥さんが諾と云つて呉れるだらうかな」

オークス「そこはそれ、弱味につけ込む風の神さんだ。此尊い靈地に三五教の魔法使を、ソツと引張り込んだと云ふ、奥さんに弱點があるのだから、屹度俺等の意見を採用するにきまつてる。若し採用せなけりや身の破滅だからな」

エル「成程、そりや妙案だ。そんなら俺が此館の養子になるから、貴様等兩人は家令並びに内事係兼受付としてやらう。門番の分際として異數の拔擢だらう」

オークス「馬鹿云ふな。俺はデビス姫さんの夫となり當家のお世継だ。お前等二人は籤でもして家令と受付をやつたが宜からう。家令職と受付とは大變な段階がある。

若し受付となつたものは、妹さんが歸られたら受付の女房にする。お世継はごうしても姉さんの婿に限つてる。家令は役柄が上だから姫様を貰はずに辛抱するのだ。そうすりや不公平が無いだらう」

エル「時に綿屋の老爺の話に聞けば、高倉とか、旭とか云ふ三五教の化狐が、二人の姫様に化けて狸坊主と一緒にバインの森で捉まへられたと云ふ事だが、實際そんな事があるだらうか。俺や不思議で堪らぬのだ。中にはコソコソ話をしてる奴があつて、あれは狐ぢやない。本真物の姫様と云つてるものもあるが、あれが本真物ならばワックスが匿しよつた岩窟に助けに行つて、姫さんの戀を獨占するのも一興だがな」

オークス「馬鹿云ふな。彼奴は狐にきまつてる。犬に噛まれよつて首筋や耳を噛まれたり、狸坊主が首筋を噛まれたと云つて、紫になつてはれ上つて居つた、何ほ本

眞物でも、あの御面相では御免だ」

ビルマ 「おい、エル、貴様は畢丸を潰されて綿屋の別宅に、スッ込んで居り乍ら、どうして、そんな事が目に着いたのだ。チツと可笑しいぢやないか」

エル 「何、俺だつて女と聞いちやジツとして聞いて居れないので、「ワッショク」と門前を撥いで行くのを、門口に飛び出し、トックリ見た所が姫様に似て居るが、何となしに險相な顔して居るので、狐のお化けかと思つて居たのだ。どうも人間の目で眞偽は分らぬが、まア百人の者が七十人迄がお化けと云ふのだから、大勢の目の方が本當だらうかい」

オークス 「さア、無駄話はどうでも宜いが、手つ取り早く約束を定めて置かうぢやないか。俺は此館の御養子にきめて置いて、家令職と受付との、これから約束だ。どう

ぢや家令職になれば姫様は貰へんなり、低い役の受付になればケリナ姫を女房に貰へるのだ。位をみるか、色をみるか、と云ふ處だ」

ビルマ 「そんなら俺は受付になるわ」

エル 「馬鹿云ふな。受付は俺の持前だ。天下御免の受付だ。受付は俺にきまつてる。ヘン濟みまへんな」

オークス 「おい、兩人、姫様は實際生きてゐるか、ムらぬか分らぬのだ。萬一此世に生きてムらぬとすれば矢張家令になつた方が得だぞ」

エル 「そんなら。思ひきつて俺は家令になるわ。ビルマ、お前、受付になつて呉れ」

ビルマ 「馬鹿云ふな。誰が受付なんかするものかい。適才適所と云つて、此館の家令は貴様のやうな狼狽者では到底勤まりつこは無い。ビルマさんに限つてるわい」

エル「然し、さうするとワックスさんのやり場が無いじゃないか」

オークス「何、ワックスなんか、彼奴の悪事を素破抜いてやれば、文句なしに命惜さに逃ぐるにきまつてる。三人でさへも配置に困つてるのに、彼奴が出て来て堪らうかい。彼奴は勘定外だ。彼奴の老爺も近々に死んで了ふから、さうすりや門番の端にでも使つてやるのだな。エッへ、、、」

斯く何時の間にか話に身が入つて大聲で囀つて居る。最前からワックスは壁に耳をあて、體を隠し、三人の話を聞いて居たが業が湧いて堪らぬので、ソッと大便所に入り長柄杓に汚いものを持つて来て、自分の顔を隠し乍ら三人の前に現はれ、バツと顔にふりかけ、逃げ出す途端に疊の破れに足を引っかけ、スッテンドウと倒れて了つた。倒れた拍子に間を隔てた間に高い鼻を打ち、ウンと息をつめ、ピクともせず苦しんで居る。

三人は不意に臭い物を顔一面にかけられ、顔をハンカチーフにて抑へ乍ら、炊事場の方へ洗ひに行かうと走つた途端に、ワックスの體に躓きバタリと倒れた。次から次から四人が糞まぶれになつて引つくり覆り、ウン／＼唸いて居る。此物音に鬼國姫は此場に走り來り見れば、何とも云へぬ臭い香がブン／＼と鼻をつく。姫は鼻を掴み乍ら近寄り見れば、糞まぶれの長柄杓が一本と、四人の男が糞まぶれになつて、其處へ倒れて居た。

鬼國姫「糞度胸据わした男が糞まぶれ

足躓いて苦楚を管めけり。

婆の身も糞にまぶれた糞奴

臭い奴には呆れ果てけり。

物臭い企み致した天罰で

男が痛で倒れしならん。

オークスの心汚き門番が

今日は大糞被りけるかな。

糞丸を牛に踏まれて又ここで

糞被せられ吠エル馬鹿者。

ワックスか又は糞かは知らねども

どちらにしても臭い奴かな」

ワックス 「糞奴三人揃ふ其中へ

糞まぶしたり糞婆の家で」

鬼國姫 「ワックスよ、我に向つて糞婆と

云つた言葉を忘れずに居よ。

いろくくと臭い思案を廻らして

糞を管めたる今の天罰」

オークス 「テルモンの館の家令となる身には

糞の苦勞も何の者かは」

鬼國姫 「いろくくと臭い奴めが寄り合ふて

これの館に糞まき散らす。

これよりはハルナの都の神社

大黒主に申上げなん。

何事も皆三千彦の神司

諭し玉ひぬ汝等が企みを。

人の家の惱みにつけ込み糞思案

廻らし吾身を捨つる馬鹿者」

オークス 「三千彦は三五教の魔法使

詳さに告げん大黒主へ。

大黒主此有様を聞きませば

鬼國姫の身の終りぞや」

かゝる處へエキス、ヘルマンの兩人は慌しく走り來り、ブン／＼嗅ふ臭氣に鼻を抓

み乍ら、

エキス 「もし、奥様、ワックス其他の連中じやムいませぬか。貴方は四人の者に陰謀露

顯を恐れて糞を溶びせ打ち倒し、命をさらうとなさつたのですか、こりや怪しから

ぬ。もう斯うなつては御主人様だして容赦は致しませぬぞ。さあワックス、確り成

さいませ。之からハルナの都へ早馬使を立て貴方等の敵を討つて上げませう」

と云ひ乍ら尻ひとつからけ、エキス、ヘルマン兩人は表門さして雲を霞と駈け出した。

四人はヤツと起き上り、互に體の洗濯を終り、一間に入つて今迄の喧嘩は暫らく横に

置き、再び野心を充すべく秘密相談會を開く事となつた。鬼國姫は夫の病氣を氣遣ひ

匆々に此場を立つて奥の間に身を隠した。

(大正一二、三、二四、舊二、八、於皆生温泉演屋、北村隆光録)

第六章 強

印 (一四五六)

テルモン山の館より十七八丁奥の谷間に大蛇の岩窟と云ふ深い穴がある。そこには三千彦を無理無体に押し込め、二人の門番が嚴重にワックスの命令によつて守つて居た。

甲「オイ、何でも此中に突込んである魔法使は大それた事をしやがつたさうだな。如意寶珠の玉を盗み出し、そしてワックス様が匿して居つた等と讒言をし、デビス姫様の夫となり、此館を占領しやうとしたドテらい悪人だと云ふ事だが、魔法使だから何時此鐵の門を破つて出るか分らぬ。出たが最後、ごんな目に會はずか知れないぞ。何程日常を澤山貰つても斯んな劍呑な商賣は御免蒙り度いものだな」

乙「何、心配するな。魔法使と云ふものは或程度迄は法が利くだらうが、もう種が無くなつて皆に捉まへられ、斯んな處へ突込まれよつたのだから、もう大丈夫だ。滅多に出る氣遣ひはないわ。こうして十日も二十日も番して居れば餓れて死んで了ふさうすりや大丈夫だよ。俺等は日給さへ貰へば宜いのだからな」

甲「然し、此奴が死んで化けて出やがたら、それこそ大變だぞ。何とかして斷り云ふ譯には行くまいかな」

乙「そんな事、いくものかい。何時もワックスの旦那に難儀な時に無心を云つて助けて貰つてるのだから、斯んな時に御恩報じをするのだ。宮町中の難儀になる處を、ワックスさんのお蔭で此奴の盗んで居つた如意寶珠の玉も分り、俺等の生命まで助けて貰つたのだから、此奴が斃る所迄俺等は根比べをやらねばならぬのだ。餘り心

配するな。心配するど頭の毛が白うなるぞ」

斯く話して居る處へ遙か上の方の森林から頭の割れるやうな宣傳歌が聞かれて来た。

「神が表に現はれて

善惡を惡惡を立分ける

三五教の宣傳使

三千彦司が現はれて

三九坊に魅せられし

家令の忤ワックスが

神の館の重寶を

密かに置し置き乍ら

三千彦司に看破され

我身危くなりしより

正反對に如意寶珠

匿せしものは三千彦司

宮町一般觸れ歩き

何にも知らぬ人々を

誑りおほせし憎らしさ

如何にワックス奸智をば

振るひて一時は世の中を

欺き渡る事あるも

天地を造り玉ひたる

此世の主と現ませる

誠の神は何時迄も

曲の猛びを許さんや

我は三千彦神司

岩窟の中に押込まれ

暫し思案に暮る、折

月照彦の大神の

遣はし玉ふエンゼルが

現はれ玉ひ忽ちに

眞鋼の鎚を打弾ひ

此岩窟に穴穿ち

容易く救ひ玉ひけり

初稚姫の遣はせし

神の變化のスマートが

今や吾身に附添ひて

守らせ玉ふ上からは

假令ワックス幾萬の

軍を率ゐる攻め來こも
 神の息吹の言靈に
 愛と善との聖徳を
 信と眞との光明を
 これの館の禍を
 あゝ面白や／＼
 現はれ來る神館
 悔ひ改めて吾前に
 根底の國の苦みを
 永遠無窮の樂みを

如何でか恐れん 惟神
 一人残さず吹き散らし
 此土の上に輝かし
 天地の間に照らしつゝ、
 拂はにやおかぬ神の道
 神の力は目のあたり
 汝等二人の番卒よ
 來りて罪を謝すならば
 神に祈りて救ひやり
 味はひ暮す天國へ

導きやらん 惟神

神に誓ひて宜り傳ふ

と歌ひ乍ら猛犬を引連れ悠々と岩窟の上を下り來る。二人の番卒は此姿を見るより
 大地に頭をすりつけ、尻をもつ立て、一言も發し得ず、謝罪の意を表し乍ら慄ふてゐ
 る。太陽は漸く西山に没し、四邊はおひ／＼と暗くなつて來た。三千彦は二人に案内
 させ密かに抜け道より館を指して歸り行く。

ワックス、オークス、ビルマ、エルの四人は體を水にて洗ひ、會議室に入つてゴソ／＼
 と晝の中から日の暮れるのも知らず野心會の打合せをやつて居た。スマートは室内の
 怪しき臭に鼻をひこつかせ、小聲で「ウー／＼」と唸り乍ら、三千彦に四人の悪者が
 密談に耽つてゐる事を知らした。三千彦は二人の番卒を靈縛したま、裏口よりソツと
 鬼國姫の居間に進み入つた。鬼國姫は悲痛の涙にくれ、今後如何になり行くならん

青息吐息をついてゐた。

鬼國姫「如何にせん今日の悩みを切り抜ける

三千彦司徳ばるゝかな。

三千彦の神の司は三五の

誠の神の使なるらん。

下男僕は數多あり乍ら

心汚きものばかりにて。

我身のみ愛する輩集まりて

主人を思ふ人ぞなきかな。

泣き干して涙の種もつきにけり

救はせ玉へ三五の神。

如何ならん悩みに會ふも神館

守らん爲めには吾身を惜します。

如意寶珠貴の寶は歸りぬれど

吾子寶は如何になりしぞ。

背の君の病益々重なりて

早絆糸の切れんぞぞする。

世の中に憂に悩める人々は

ありとし聞けき吾に如かめや。

如何ならん昔の罪の廻り來て

かゝる苦しき日をや送らん。

待て暫し神の恵みの深ければ

やがて三千彦歸り玉はん。

三五の教司を仕わす

誠一つの君は益良夫

と悲しげに述懐を宣べて居る。そこへ三千彦は忍び足にて歸つて来た。

三千 「奥様々々」

と小聲に呼ぶ。鬼國姫は此聲を微に聞いて夢かと思ひ許り打驚き乍ら、微暗き行燈の光に透かして見れば擬ふ方なき三千彦司であつた。

姫 「ア、貴方は三千彦様、よう、まア歸つて来て下さいました。何處へお出でになつ

て居りましたか」

三千 「ハイ、これには長いお話がムいます。然しこれ等兩人が聞いて居りますれば暫らく靈縛を加へて置きます」

と云ひ乍ら耳と口とに靈縛を加へ、次の間に忍ばせ置きスマートをして警護せしめたスマートは二人の番卒の一舉一動にも眼を配り、二人が一寸でも動かうとすれば目を怒らし、噛みつかんとする勢に恐れをなして、慄び／＼次の間に控へて居た。

三千 「さアもう、これで大丈夫、然し乍ら旦那様は如何でムいますか」

姫 「ハイ、お蔭様で、まだ續いて居ります。一時も早く娘に會ふて死に度いと申して居りますが、まだ娘の行衛は分りませんので、今も今とて貴方の事を思ひ出し、泣いて居つた處でムいます」

三千 「どうしてもお嬢さん二人とも、修験者に送られ、已に此館へお歸りになつて居らねばならぬ筈でムいます。之には何か悪人輩の企みがあるのでムいませう。今あの會議室でワックス以下四人の連中が密々と相談を致して居りますれば、私が此館へ歸つた事を覺れば彼等は如何なる事を致すか分かりません。何卒誰も來る事の出來ない居間へ案内して頂き度いものでムいます。そこでトッキリとお話を申上げませう」

姫 「チツと窮屈でムいますが我夫の病室の上に暗い居間がムいます。そこは誰も上る事は出來ませぬから、そこへお越しを願ふて、何かの事を承はり度うムいます」

三千 「それは好都合です。さア早く參りませう。何時熊者がやつて來るか知れませんか」

と云ひ乍ら鬼國姫に導かれて二階の暗き一間に微な火を點じ、身を隠し密々話に耽つた。

三千 「實の所は二人のお嬢様は私の察する所、テルモン山の岩窟に隠して居るやうに考へます。ワックスと云ふ奴、デビス嬢様に戀着し、脇鐵砲を喰はされたのを、性懲りもなく、飽迄戀の慾望を遂げんとし、如意寶珠を隠してお節を困らせた上、往生づくめで押掛け婿にならうと企んで居た所へ、拙者が參つたものですから陰謀露顯を恐れ、反對に拙者を魔法使と觸れ廻り、如意寶珠を隠したのも拙者だと主張致し何も知らぬ町民は彼が言葉を真に受け、又修験者が送つて來た御兩人様を化物だと吹聴し、岩窟に匿しおき、往生づくめに姫様に得心させた上、御主人の御死去後正々堂々と乗り込まうと云ふ悪い企みでムいませう。併し乍らお嬢様は確りした女

丈夫ですから、決して彼が毒手におか、り遊ばす案じは要りませぬ。又決して彼等に身を任せ、操を破らるゝ事はありませぬから御安心下さいませ。併し乍ら今直に如何するに云ふ事も出来ませぬ。町内の人の心が鎮まつた上、徐にワックスの陰謀が現はれた處へ拙者が首を出し、姫様をお助けする事に致しませう。こゝ二三日は落着いて居らねばなりません。又御主人の御病氣に、さしひきがあつても此四五日は何ともありませんから御安心下さいませ」

姫「それを承はりましたして一寸安心致しました。娘は無事で居りませうかな。主人が聞きましたら何程喜ぶ事です。これを冥士の土産として潔く歸幽する事でよいませう。ア、惟神、靈幸倍坐世。然しワックスと云ふ奴は親にも似ぬ悪黨でよいませぬ。さうしてマンの悪い時には悪い事が重なるもので、家令のオールスチンは大

怪我を致し吾主人よりも先に死ぬかも知れぬ様な重態でよいませぬ。あれを助けてやる譯には行きますまいかな」

三千「とても助かりますまい。肋骨を二本迄折つて居ますから」

姫「さて困つた事でよいませぬ。これも何かの因縁でよいませう。あまり忤が悪黨を致しますので子の罪が親に酬うたのではよいませぬ。あまり忤が悪黨を

三千「決して、子の罪が親に酬ふ等と云ふ道理がよいませぬ。神様は公平無私にいらつしやいますから、決して人を罰め、苦める様な事をなさる筈がよいませぬ。況して罪なき本人に子の罪迄おきせ遊ばす不合理な事がありませうか。只此上はオールスチン様の冥福を祈つてやるより外に道はありますまい。そして一時も早く國替を成さつて病氣のお苦みをお助け遊ばす様、祈るより外に道はよいませぬ」

斯く密々話をして居る處へ、ワックス、オークス、ビルマ、エルの四人は酒を矢鱈に啣り乍ら、ドヤ／＼と病室に入り來り、

ワックス「これは、鬼國別の御主人様、御病氣は如何でムいます。お訪ね致さねば濟まないのですが、何分私の父が大怪我を致しましたので、一人よりない親、見逃す譯にもゆかず、夜の目も寝ず、孝行第一に看病致して居りました。だも申して大切な御主人様、お訪ね致さぬも不忠の至りと、氣が氣でならず、宅に居つても心は御主人様の身の上に通つて居ります。ア、忠ならんご欲すれば孝ならず、孝ならんご欲すれば忠ならず、さうも世の中は思ふやうには行きませぬ。さつちや……いね、やつち道、私の爺は肋骨を折られて居ますから死なねばならぬ運命でムいます。それで早く死んで呉れますれば御主人様のお世話が出來ます事と、心は焦りますれど、

病氣ばかりは人間がさうする事も出來ませんので、ツヒ失禮を致して居りました。何卒御無禮の罪お赦し下さいませ。もし御主人様、家令の父が亡くなりましたも此ワックスがピチ／＼して後に控へて居りますれば、決して御心配下さいませ。そしてデピス姫様とケリナ姫様とは間近い内にお歸りになりますから、及ばず乍ら私がお世話をさして頂きます。これも御安心下さいませ。豫めワックスに娘二人を宜しく頼むと只一言仰有つて下さいませれば、獅子奮迅の活動を致し、姫様を御目にかけるでムいませう。こゝに貴方の遺言状を代書して來ましたから、一寸拇印を押して下さいませう。何もワックス一人の爲ではムいません。お爺、町内一同の爲は申す迄もなく、テルモン國一國の爲でムいますから」

鬼國別はソファーの上にはヤツと起き上り凹んだ目をクワツと睜き、力なき聲にて

鬼國「お前はワックスだつたか、何ぞか云つてる様だが病氣のせいか、耳がワン／＼して何も聞けない。女房が其處邊に居るだらうから話があるならトックリに女房とじて呉れ。私はもう體が弱つて耳さへ聞けなくなつたから」

と故意に鬼國別は煩さを排除せんと耳に事寄せて取り合はぬ。

ワックス「もし、御主人様、チと確りして下さいませ。此筋には三千彦と云ふ魔法使が來ましてから怪事百出、貴方の御病氣も彼奴の魔法の爲でムいますよ。その三千彦をテルモン山の牢獄へ押込め、お筋の禍を除いたのは此ワックスでムいますから、御安心下さいませ」

鬼國「何、あの三千彦様を岩窟へ打ち込んだとは、そりや大變な事をして呉れた。あのお方は生神様だ。左様な事を致したらお前等に神罰が當るぞ。早くお助け申して吾

前に送つて參れ。怪しからぬ事を致すでないか」

と怒氣を帯びて力無き聲に嘸鳴りつけた。

ワックス「ハ、、、、貴方の聲は嘘でムいましたか。何ぞ都合の好い耳でムいますな御主人様、よく考へて御覽なさいませ。今日か明日か知れぬ身を以て、さう頭張るものぢやありません。此お筋は此ワックスが居らねば駄目でムいます。バラモン教の聖場へ三五教の宣傳使を引張込む等とは重大なる罪でムいませう。こんな事が大黒主の耳に這入つたら如何致します。お道の爲には此ワックスは御主人様でも、何でもムいませぬ」

と嘸鳴り立てた。鬼國姫、三千彦は頭の上の二階にワックスの聲を聞いて居たが下りる譯にも行かず、

「マンの悪い處へ悪い奴が出て来た者だ」

と顔を擧め、一時も早く歸りますやうに、一生懸命に三千彦は大神に祈願を凝らして居た。ワックスは益々大きな聲で主人より拇印をもらんと迫つて居る。看護婦のセールは見るに見かねて、

セール「もし、ワックス様、旦那様は御大病のお身の上、お體に障ますから何卒お控へ下さいませ。奥様がお歸りになつた上、ミツくりと御相談遊ばした方が宜しからう」

ワックス「エー、看護婦の分際として家令の忤ワックスに向ひ、無禮の申し様、すつ込んで居れ。汝等如き卑女の容喙する處でない。もし御主人様、是非ともこれに拇印を願ひます」

とつきつける。鬼國別は止むを得ず、

鬼國「ア、私は目も眩み、耳も遠くなつて何にも分らないが、こんな事が書いてあるのか。大きな聲で読んで呉れ。そしてワックスが讀んだのでは當にならぬ。セール、私に代つて、その遺言狀を讀んで呉れ」

セール「ハイ、承知致しました。ワックス様、さア此方へお渡し下さい。妾が旦那様の代りに讀まして貰ひますから」

ワックス「モシ、御主人様、讀んだ以上は拇印を押して下さいませか。押して貰はなくては讀んで貰つても何にもなりません。それから前に定めて置かねば讀む譯には行きませぬ」

鬼國「讀んだ上で拇印を押してやらう」

ワックス「イヤ有難い。おい、セール、そこは……それ……腹で讀むのだぞ。妙な讀み

やうを致すと家令の忤ワックスが承知致さぬぞ」

と睨みつける。セールは委細頓着なく病人の耳許に口を寄せて聲高らかに読み初めた

遺言状の事

- 一、我れ歸幽せし後はテルモン山の館の事務一切を家令の忤ワックスに一任すること。
- 一、鬼國姫は別に館を建て、比丘尼として一生を安樂に送らすこと。
- 一、デピス姫、ケリナ姫はワックスに一切身を任すこと。
- 一、ワックスを當館の養子となし、デピス姫を女房とする事。
- 一、ケリナ姫はワックスの意志により第二夫人となすもよし、都合によれば他家へ縁づかすもワックスの自由たるべきこと。

右の遺言状は鬼國別重病のため筆寫する事能はざるを以て、ワックスに代筆せしめ

後日のため拇印捺するもの也。

年 月 日

鬼國別神司

ホ、、、何とまあ虫のよい遺言状でムいますこと。モシ、旦那様、こんな專御承知遊ばしますか」

鬼國「以ての外的事だ。左様な遺言状には拇印は決して押さない。引裂いて了へ」

と怒りの聲諸共にワックスを睨めつけた。ワックスは手早くセールの手より遺言状を奪ひ取り、主人の指に印肉をつけ、無理に押さそうとした。老衰の鬼國別は抵抗する力もなく進退維谷まつた處へ、宙を飛んで馳來る一頭の猛犬、ウー~~~~、ワック~~~~叫び乍らワックスに跳びかかり腰の帯をグツ喰はへて、猫が鼠を喰わへた様な調子で館の外へ運び行く。オークス、ビルマ、エルの三人は顔色をサツと變へ、スゴク

と受付の間に走り込み、青い顔して慄ふて居る。鬼國姫はヤツと胸撫で下し四邊を窺ひ乍ら病床に下つて来た。

(大正一二、三、二四、舊二、八、於伯耆皆生温泉濱屋、北村隆光録)

瑞 月

かけ付けて見れば馬鹿らし上り汽軍

華を去りて實に就かんと團子食ひ

汽車を待つプラットホームや風さむし

花園のあたり走るか汽車の音

お土産の團子で客を花むけし

第七章 暗

闇 (一四五七)

ワックスは猛犬スマートに咬へられ、門の外に運び出され、暫くは氣も遠くなり、夏草の上に身を横たへて唸いて居た。斯る所へビルマは月を賞め乍ら鼻唄を歌ひやつて来た。忽ち一天掻き曇り、大空は墨を流した如く、サツと月光を包んで仕舞つた。

ビルマ 「暗闇の一滴が

天と地との間に

ほつたりと落ちるこ

暗黒と静寂が

うろたへてやつて来る

暗 闇

○

ふくれ上つた暗闇の中に

蕨の波はぎよみ

煙突の林は黙立し

四方の山脈は横臥し

萬物は

今し

暗灰色に溶けて行く

○

暗闇の一つの壁から

煤けた

赤らんだ

月が

顔をしかめた

○

月はユララ〜と

ゆらめきながら

険しい雲の坂路を

昇り初めた

○

しばし

やがて

悪魔が翼をひろげて

黒雲の臥床に

月を閉ぢ込めて了ふと

暗闇がぬけ落ちた齒の間から

けら／＼と笑ふて

急いで地の中へ潜り込んだ

○

翌る朝

生温い雨が

しよほ／＼と降つて居た

○

月は恐ろし雲間に隠れ

黒い犬奴が飛んで来て

ワッど驚くワックスが

門の外へぞ引づり出した

ビルマはビル／＼と慄ひ出し

翠丸潰したエルの奴

さはさり乍らデビスのお姫さん　さこの何處へ雲がくれ

ワックス司は雲がくれ

ウウ、ワン／＼と吠へ猛る

帯を咬へてとん／＼と

その怖ろしい見幕に

オークスさんは逃げ出す

雲を霞と隠れ行く

月雪花にも擬うよな

綺麗なくお顔立

一寸見てもさへ顔ひつく

雲がお月を隠すよに

いづこの曲津がやつて来て

テルモン館の蓮華花

何處へ隠したか知らねども

ワックスさんは氣が揉める

あれ程惚たお姫さん

三五教の魔法使

みちく彦に櫻はれて

指を咬へて口アングリミ

嗚今頃は草の露

涙に濕る事だらう

とは云ふもの、俺だとして

木石ならぬ人の身だ

男と生れて来たからは

あんなナイスと一夜の枕を

交して見たい氣も起る

あ、惟神々々

月下氷人の引き合せ

姫の所在を尋ね出し

第一番の功名手柄

やらねばならぬ羽目となり

彌々節を抜け出して

月の光を便りとし

此處迄やつて来たもの、

一寸先も見えわかね

眞暗がりの馬場道

アイタタッ何者ぢや

嫌らしいものが觸つたぞ

これやく其方は化者か

合點のゆかね代物ぢや

三五教の魔法使

こんな所に化者を

現はし俺の肝玉を

取らうとしても駄目だぞよ

ウンくくくそれや何だ

狐か狸か狼か

但は天狗か古狸

譯の分らぬ唸り聲

逃げやうと云つても足許が

ハッキリ分らぬ此場合

この怪物の正体を

度胸を据わて調べよか

もしも姫さんであつたなら

それこそ思はぬ儲けもの

あゝ、惟神々々

御靈幸倍ませよ」

と慄ひく歌つて居る。俄に黒雲はバツと晴れて煌々たる夏の月は四邊を晝の如く照した。草に置く露の玉には月光宿り瑠璃の如くに光つて居る。ビルマは足許の黒い影を見て首を傾け窺へば正しく人間の唸り聲である。怖々ながら側に寄り「オーイ／＼」と二つ三つ揺つて見た。倒れた影はムク／＼と起き上りビルマの顔を覗くやうにして凝視めて居る。ビルマは月を背に負うて居たのでハッキリ顔が分らなかつたが、一方

の顔には月光を受けて顔の生地迄分つて居る。

ビルマ「ヤアお前はワックスさんぢやないか、随分甚い目に遇つたものだなア。さうもなしに山犬がやつて来やがつてお前を咬へて出た時の怖ろしさ、友達の難儀を見捨てる譯にもゆかず、オークス、エルの奴はビリ／＼慄つて居るなり、剛膽不敵の此ビルマが助けやうと思ふてやつて来た中、お前に突き當り、さうも濟まん事をしたさうだ、さうも怪我は無かつたか」

ワックス「ウン有難う、よう来て呉れた。友達なればこそ来て呉れたのだなア。山犬が出て来て此處迄俺を咬へ込み、最後になつて三つ四つ振りやがった時には目がまく／＼して怖かつたよ。併し乍ら親友なればこそお前が来て呉れたのだ。この儘放つて置けば俺の命は無くなつたかも知れない。あゝ、有難い、お禮申す、キット俺が目

的を達したならお前を家令にしてやるから楽しんで待つて居れ」

ビルマ「何ぞ俄に雲行が變つたものですか。いつも私を門番々々と呼び付になさいました。今日に限つて親友だ云つて下さつた。あ、有難い、幾久しう親友として御交際願ひますよ。いつもなら我々を塵埃の如く振向ひても下さらんのだが、矢張り叶はぬ時の神頼み、こんな時に來て貰うと嬉しいと見えますな。併し斯様の所に居ると誰に見つかるとも分りません。サア一時も早く貴方のお館迄送つて上げませう」

ワックス「家へ歸る所か、お前は何ぞ思ふかも知れぬが、又しても三五教の魔法使が館の中に潜り込んで居るやうだ。さうでなければあの犬が出て來る筈がない。サア是から、人氣の立つたを幸ひ、鉦や大鼓を叩いて辻説法を初め、あの三千彦を門外に誘き出し、やつつけねば陰謀露見して我等の笠の臺が飛ぶかも知れん。少し腰が痛

くとも辛抱して今晚は大活動をやるのだな。アイタタッタ。山犬の奴、ひきくやつ付けやがつた。オイ、ビルマ、何處かで驢馬でも引つ張出して來て呉れ。そして鉦も太鼓も探して持つて來い。天へ登るか地獄へ墮ちるか云ふ境目だからな」

ビルマ「三千彦の魔法使は岩窟の中へ閉ぢ込めて、二人の番卒がつけてある上は、滅多に館の中に歸つて來る筈がありません。お前さん山犬に振られて氣が狂うたのではありますまいか」

ワックス「エ、馬鹿云ふな、その位な事に氣が狂うものか、サア事後れては一大事だ、早く〜」

と急ぎ立てる、ビルマは一目散に馳け出し驢馬に跨り一頭を引き連れ來り、ワックスを助け乗せ、自分は豆太鼓や摺鉦を打ち鳴らしながら、宮町の四辻に向つて馳け出し

トントントンチントントンチン

チントントンチントントン

と夜中に館屋式に噓し立てた。左平、八平、田吾作もこの聲に夢を破られ慌て戸外に駆け出した。ワックスは馬上より大聲を張り上げ、

ワックス「ヤア、宮町の連中殿、又もや三五教の魔法使がお館に現はれた。サア戸毎

に叩き起し脛腰の立つものは拙者に従つて館の表門に押しかけられよ、時後れては

一大事、魔法使が先度のやうに寶を奪い取り、終ひには命迄取つて仕舞ますぞよ。

悪魔を滅ぼすは今此時」

と嘯鳴り立てた。次から次へに慌者が觸れ歩き、瞬く中に二三百の老若男女が四辻に集まつて來た。ビルマは馬上より

ドンドコドンドコドコドコドン

チヤンチキ、チヤンチキチン

と噓し立て乍ら先頭に立つて進む。ワックスは馬上から進軍の歌を歌ひ初めた。

ワックス「出た、出た、鬼が出た、テルモン山の神館

鬼國別の奥の間に、打てよ打てよ、今打てよ

館の大事は云ふも更、汝等一同の難儀だぞ

ドンドコ、ドコドコドコドン、チヤンチキ、チヤンチキチン

各自家の重寶を、戸毎に盗んだ泥坊も

三五教の魔法使、三千彦司と云ふ鬼だ

殺せよ、打ち殺せ、これを見逃し置いたなら

神の館は云ふも更

お前等一同の身の終り

命を取るか取られるか

千騎一騎の正念場

ドンドコ〜ドコドコドン チヤンチキ〜チヤンチキチン

歌と拍子につれて數多の老若男女は月光を浴びながら館の表門指して押し寄せた。

この物音に、鬼國姫、三千彦は不審を起し、鬼國姫に病人の看護をさせ置き、自分は

唯一人門外に駈け出した。ワックスは三千彦の姿を見るより、

ワックス「ヤア〜皆の者、今其處に現はれた奴が町民の仇、大泥坊の魔法使だ、それ

逃がすな」

と下知すれば、何も知らぬ老若男女は蚯蚓に蟻が集まつたやうに四方から木片をもつ

て打ち叩き寄つて集つてふん縛り、ワッショ〜と聲を揃へてアンブラック河の水瀬に

ザンブミ許り投げ込んで仕舞つた。あ、三千彦の運命はさうなるであらうか。

(大正一二、三、二四、舊二、八、於伯耆皆生温泉宿屋 加藤明子録)

瑞 月

人の子の吾を神の如崇め立て

仕へむとする人ぞ歎てき

吾爲に鞭を加ふる人もがなご

朝な夕なに祈る淋しさ

第八章 愚

摺 (一四五八)

ワックスはビルマと共に巧く町民を煽動し、三千彦を袋叩きにして、アンブラック川に投げ込み、意気揚々として己が館に歸つて来た。父のオールスチンは二人の看護婦に看護され乍ら現になつて、ワックスと連呼してゐる。そこへソツと歸つて来たワックスは、盗猫が留守の家を覗く様な態度で、ノソリノソリと這入り來り父の病床に近寄り、二人の看護婦に向ひ小さい聲で

ワックス 「もし、看護婦さん、日夜御苦労ですが老爺の病氣は助かりませうかな」

看護婦の一人 「はい、お氣の毒乍ら到底諦めて貰はねばなりませんまい」

ワックス 「成程、それも仕方がありません。何程悔んだつて壽命はさうする事も出来ま

せぬからな」

ビルマ、小さい聲で、

ビルマ 「親の財産あてにすりや

藥鐘頭が邪魔になる」

とウツカリ喋つた。病人のオールスチンは耳敏くも此聲を聞きつけて苦しい體を起き上り、……悴のワックス奴、大切の親の死ぬのを待つて居やがるのだな……と苦痛を忘れ、聲を尖らして、

オールス 「こりや悴、何と云ふ不孝な事を申すのか。ま一度今云つた事を云つて見よ」
ワックス 「へ、あまり御病氣が重いので心配して看護婦に尋ねて居つた處です。ここに來てゐる門番のビルマと云ふ奴、お父さんが大病で私が、これだけ心配してるのに

其心も知らず、あんな事を云じやがったのです」

オールルス 「そうぢやあるまい。貴様常平生から左様の事を云つて居るものだからビルマが真似をしたのだらう。貴様はチッと心得ねばならぬぞ。俺が目を冥つて了へばお前の身邊は忽ち危くなつて来るぞ。如意寶珠の玉を隠したり、種々雑多と陰謀を企て、居つた事は三五教の三千彦様がスッパリ御存じだ。こんな事が表沙汰になつたならば家令の家は断絶、お前の命はなきものと覺悟せねばなるまい。これが一生の別れだから憎い忤でも矢張り親の因果として庇い度うなつて来る。今の間何處かへ身を隠し、遠い國へ行つて苦勞を致したが宜からう」

ワックス 「お父さん、そりや違ひます。三千彦と云ふ魔法使が盗つて居たのですよ。その証據には町中の者が袋叩きにして……ムニャ〜〜」

オールルス 「何、町中の者が、三千彦を袋叩きにしたと云ふのか。そりや大變な事をして呉れた。早くお詫をせなくちやお爺の一大事が起るかも知れんぞ」

ビルマ 「何と云つても町内が寄つて集つて雁字搦みにし、アンブラック川に投げ込んだものですから、遠うの昔に死んでゐますよ。滅多にワックスさんの難儀になる氣遣ひはありません。寧ろ神館の惡魔を退治なさつた結構な救世主です。そして鬼國別様の御養子になれる約束がチャンと奥さんとの間に定つたのですから、オールスチン様、御安心なさいませ」

オールルス 「一人の忤を養子にやると云ふ事はどうしても出来ない。さうすればオールスチンの家は血統が絶わるぢやないか」

ワックス 「お父さん、そんな心配は成さらずに早く成佛して下さい。貴方の苦みを見て

居るのが子として見て居られませんか。私にデビス姫と結婚した上は三人や五人の子は出来るでせう。總領は養家の跡継ぎし、次男をオールスチン家の跡目相續にすれば宜いぢやありませんか。貴方の血統たる私が残つてゐる以上は大丈夫です。ゴテ／＼云つたら養家をオールスチン家にして下さるべきです。(小聲)「エー年寄だてら死際になつて要らぬお節介だ。い、加減に斃つたら宜いのに」

と後振り返つて小聲に呟いて居る。幸に病氣に悩む父の耳には這入らなかつた。オールスチンはグタリとなつて苦しげに又もや寢臺の上に倒れて了つた。

看護婦「もし若旦那様、餘り入釜しう仰有いますと御病氣に障ますから、何卒別館の方へ行つてお休み下さいませ」

ワックス「オット、よし／＼、それを待つて居たのだ。然し看護婦さん、此方にも都合が

あるのだが、お前の考へでは今日一日は大丈夫だと思ふか。葬禮の用意もせなならぬからな」

看護婦「御心配なさいませ。屹度本復さして上げます。假令おなくなり遊ばすとして

も、三十日や五十日は大丈夫ですからな」

ワックス「へー、何分御介抱を宜しう頼みます」

と云ひ乍ら別館の間に至り、冷酒を兩人差向ひになつてグイ／＼とやり初めた。ビルマはへ、れけに酔ひ潰れ、そろ／＼銅羅聲を張り上げて唄ひ出した。

ビルマ「オールスチンの老爺さん 肋骨を折られてウン／＼と

呻つてゐる憐らしさ 癒りもせねば死にもせず

厄介至極の老爺さん ワックスさんも嘸や嘸

困つてゐるに違ひない

早く何とか持つて

ワックスさんの目的を

立てさせてやらねばなるまいぞ

もしも都合好う行つたなら

私は一躍家令職

之を思へば一時も

早く老爺さんに死んで欲しい

欲しいわいな〜

藥鐘老爺が死んだなら

皆さん喜ぶ事だらう

ヨイセイヨイセイ

思ふやうにはいかぬもの

ホんに浮世はじれつたい

ヨイセイ〜

ワックス 「こりや何ほ何でも俺の前で、そんな事を唄ふ奴があるか。俺だつて肉身の親だもの、死ぬのがチツとは……嬉しいとも悲しいとも思はないよ。併し乍ら老爺が

死ねば此財産がスツカリ俺の所有物になるのだから嬉しい様でもあり、只一人の親が死ぬのだから悲しい様でもあり、嫁入りと葬式と一緒に来たやうで一掬同情の涙を流して居るのだ。貴様も餘程没曉漢だなア

ビルマ 「没曉漢か、何か知らぬが此ビルマは心にも無い追従を云ふのは嫌ひだ。ワックスさん、お前の心は此ビルマが云つた通りだらう。そんな目に睡を着けるやうな同情は止めなさい。それよりも態よう老爺に早く死んだらよいと云ふたが宜しからうぜ。悪黨なら悪黨らしく、男らしくせぬのかい。そんな事で大陰謀が成就するものか、お前さんも徹底的の悪人だと思つたが大徹底的の悪人だつたな。悲しくもないのに悲しい様に云ふ丈け人間が悪いわ」

と譯の分らぬ事を管巻く、

斯かる處へエキス、ヘルマンの兩人、ズブ六に酔ひ乍ら門の戸を矢鱈に叩き、

兩人「へー、御免なせね。鬼門の神がやつて來やした。ワックスさんの陰謀先生は在宅ですか。何だ、何奴も此奴も返事しやがらん。ハハア、俺を排斥してけつかるのか。よし、何もかも、之から館へ行つて陰謀を素破抜いてやらう……」云つても俺も其仲間だ。何時曝露て笠の臺が飛ぶかも知れないのだ。それを思へば甘酒も不味なつて來る。斯う毎日々々心の鬼に責られては、やりきれない。一つワックスの若造に無心を云つて三百兩ばかりおつ放り出させ、白薬酒でも飲んで過ごさしにやりきれないわ」

と戸を無理に引き開け、ドカ／＼と病床に駆け上り、

エキス「や、御大將、矢張り御病氣ですか。そりや誠にお氣の毒だ。然し乍ら一つ

願ひ度の事があつて吾々兩人がやつて來やした。此様子では御家令さんも、とても助かりますまい。澤山の財産を持つて冥土に行く譯にもゆくまいし、チツとは善根の爲に吾々兩人に三百兩ばかり死土産を下つせね。お前さんの大切な悴の首がつかぬものも、つかぬものも、吾々兩人の吾三寸の使ひやうだ。死んでも心残りのない様に、さア、スッパリと三百兩、べて六百兩出して頂きやせう。御家令さん、小悴の命が繋けると思へば安價いものでせう」

看護婦「これ、お二方さん、旦那様が御病氣の處へ、そんな事を云つて來るものぢやありません。若旦那が別館に居られますから、彼處に行つて下さい。此病室へは這入つてはなりません。ここは看護婦の許可がなければ一歩も這入つてはいけません」
エキス「成程、これは恐れ入つた。ワックスの若旦那が別館に居るさうだ。一つ彼奴に談判

してドッサリとむしつて来やうぢやないか。グッ、、、ゲ、、、ガラ／＼／＼ドッ、
、、」

と八百屋店を出す。

看護婦「エー、好かんたらしい。掃除を成さい。妾はお前等の掃除役ではありませんぞ
ね」

エキス「エー、入釜しう云ふない。出たものは仕方がないわ。グズ／＼吐して六百兩の
金を出し借みしやがるものだから嘔吐の奴、氣を利かして八百兩、いや八百屋店を
出したのだ。エー、臭い／＼、おいヘルマン、行かうぢやないか。こんな斃つた老
爺に向つて文句を並べたつて仕方がないや」
と云ひ乍らヒョロリ／＼廊下を傳つて足をヨボ／＼させ乍ら進み入る。

エキス「おい、ワックスの大將、金だ／＼。今日は何と云つても貰はなくちや動かね
のだ。エー、よう考へて見よ。宮町一般の人間を騙くらかし、大切なお姫様を狐の
お化だに云つて、あんな岩窟に押し込めよつて往生づくめでウンと云はさうと思つて
も、さうはいかぬぞ。さア六百兩、耳を揃へて出したり／＼、グズ／＼吐すと二人
が之からお籠へ行つて素破抜くが如何だ。三千彦の宣傳使だつて、あんな事をしや
がつて、本當に太ね野郎だ。さあキリ／＼チャッ、四の五の吐さず六百兩出さぬ
かい。エー、籠棒奴、無いと云ふのか。こんなデッカい屋臺骨をしやがつて金の千兩
や一万兩、無いとは云はさんぞ。お前の老爺は家令をしやがつて、うまい事して澤
山の金を穴倉へ仕舞ひ込んだと云ふ事だ。澁老爺の、鬼老爺の悴だけあつて貴様も
仲々出し嫌ひと見れるが、何と云つても俺には出さにやならぬ理由がある。さちや

リ／＼チャッとおつ放り出さんかい。マゴ／＼して居やがる。貴様の首が飛んで了ふぞ」

ワックス 「おい、又しても／＼さう脅嚇に來ては困るじやないか。今老爺が千騎一騎の場合だから、只一人の親に離れやうとする最中だから、チッ俺の身にもなつて呉れ。老爺がなくなつてから如何でもしてやるから」

エキス 「暫らく待たれる位なら病人で取込んで居る家へやつて來るものかい。お前は、さう陽氣な事を云つてるが俺は尻に火が着いて居るのだ。さア早くキリ／＼チャッど出したり／＼」

ビルマ 「おい、兩人、さう入釜しう云はずに俺と一緒に酒でも飲んだら如何だ。話は後で緩りしたら宜いぢやないか」

エキス 「うん、酒なら飲んでやらん事はない。四斗樽と仇名をとつたエキス、ヘルマンの兩人だ。お酒の御用なら後へは退かぬぞ」

とドッカリと坐し、柄杓に掬ふてグ／＼と飲み初めた。四人はへどれけに酔ひ、四邊構はず堤を切らして唄ひ初めた。

エキス 「慾と色との二道かけて 極道息子のワックスが

二人の男をちよろまかし テルモン爺の御寶

まんまど盗み出さして 自分がデビスの婿となり

終ひの果てにや鬼國別の 権利財産横奪し

榮耀榮華に暮さうと テッキリ鼻の宵企み

夜食に外れて青い顔 致さにやならぬ時が來た

ドッコイショ〜

それさへあるにデビス姫

類ひ稀なるナイスさん

ケリナの姫と諸共に

テルモン山の岩窟へ

狐のお化とちよろまかし

押し込んで置いて夜なくに

口説きに行きよる馬鹿男

之程悪を企む奴

六百兩の黄金が

借うて出せぬ位なら

首でも吊つて死ぬがよい

何れ死なねばならぬ奴

今に天罰報ひ来て

家は断絶その身は所刑

これの館は風前の

燈火の如く刻々に

危険の迫るを知らないか

生命が大切か黄金が

大切かよつく考へよ

金と命の引替へに

早く渡せよワックスよ

俺等二人は自棄糞だ

之から館へ飛び込んで

恐れ乍ら白状する

そしたら貴様は第一に

悪の兇頭と定められ

命のないのは知れた事

俺等二人は従犯だ

重い所で遠島か

所拂ひになる位

早く出せ〜六百兩

ヨイトショー〜

こんな酸っぱい酒位い

飲ましておいて箱口合

布いた所で駄目ぢやぞよ

曝落してやらうかワックスよ

命が惜けりや金を出せ

デビスが欲しけりや金を出せ

ケリナが欲しくば金を出せ

箱の養子になり度くば

ヤッパリ六百兩の金を出せ

金を出すのが嫌なれば

俺等の前に首を出せ

此出及庖丁でチョン切つて

アンブラック川へドンブリミ

流してやらうか御承知か

あ、金が欲しい、金が欲しい

金が敵の世の中ちや

何程敵と云つたこと

金ほき笑顔のよい奴が

又と世界にあるものか

ドッコイショ〜

金ちや〜早や金じや

警鐘亂打の聲よりも

俺の催促は烈しいぞ

こら〜悪黨ワックスよ

色慾の二道かけた

此大芝居をやり遂げて

安全無事に此世をば

送らうと思へば金を出せ

資本がなくては何事も

成就せなは世の習ひ

あ、惟神々々

金をドッサリ下さんせ

バラモン帝釋自在天

大國彦の御前に

エクス、ヘルマン兩人が

畏み〜願ぎまつる

ウントコシヨ、ドッコイショ

八釜しい聲が人耳に

入るのが嫌なら金を出せ

きんな難い問題も

金で治まる世の中だ

兎角浮世は色酒

此慾望を充すのは

ヤッパリ金の神様だ

お前の首をつなぐのも

ヤッパリ金の御利益だ

蒔かない種子は生ねぬぞや

早く命の種子を蒔け

ドッコイショー〜

扱て強情い吝嗇だ

それ程金が惜いかい

雪隠の側の猿不食柿

漉うて汚うて小かうて

喰へない奴は貴様ぞや

あ、金が欲しい〜

目玉飛び出しましたよ」

「自棄糞になつてワックスを困らせるために四邊構はず喚き立てる。ワックスは堪り兼ねて矢庭に父の病室に駈け入り、ソファの下に置いてある黄金や無理に引たくり、二人の前に投げつけた。

エキス 「エへ、、流石は哥兄だ。偉い〜、我意を得たりと云ふべしだ。成程山吹色の黄金で耳を揃へて六百兩、まア之で三十日ばかりは沈黙を守つて居るから、次に

来る迄用意をして置くが宜からうぞ。今度目にゴテ〜云ふと駄目だからな」
と下駄を預け乍ら、六百兩を二人が懐に捻ぢ込み、ブラリ〜と臭い息を吐き乍ら歸り行く。

(大 一二、三、二四、舊二、八、於皆生温泉濱屋、北村岫光録)

瑞 月

我思ふ一つ汲み取る人あらば

かほぎに胸をば傷めざらまし

形ある實はよしや失するとも

愛と信との實おとさじ

瑞月

靈場はたゞへ毀たれ了ることも

いよく光を添ふる大本

今は只誠一つの限りをば

盡して神の裁き待つのみ

良の吾大神の教のませる

道にすゝまむ顯幽共に

第二篇 顯幽両通

第九章 婆

娑（一四五九）

霜に打たれて茶滓のやうになつた掠の葉は、風こがらしに吹かれてハラ／＼と小鳥の群立つやうに四邊に飛び散つて居る。木の葉の羽衣はこぎを脱いだ栗の梢えだには、成育せいよく悪き虫の綴つたイガ栗いかりが二つ三つ蜘蛛の巣くもと共に中空ちゆうくうに慄おそつて居る。鴉からすは皺枯しわがれ聲を出して岩窟いはやの麓もとの屑屋くつや葺の屋根やねに留とどまつて悲かなしげに鳴なき立てる。さこそもなしにポー／＼と諸行無常しよぎやうむじやうを告ぐる梵鐘ぼんしゆが聞きわて來る。鬼哭きこく耿々として寂寥せきれう身に迫せまり、齒はの根ねも合あはぬガタ／＼慄おそひ、破れ障子やぶしの隙間すきまから耳みみを刺さすやうな風こがらしがピウ／＼と矢やのやうに這入はいつて來る。黒ずんだ破れ疊たたみは歩く度毎たびごとに足あしにもつれつき、幾度いくたびもなく人を轉ころばして笑わらつて居る。霜柱しもはしらは覺束おぼつかなけに一本橋ほんはしを眞白まっしろけにそめ、川水かはみづは直濁ひたにじりに濁にごり、岩いはを嚙かんで吠ほ猛たけつて居

る。高姫はシャルと共に裏の岩山から小柴の朽ちた、半水を含んだ枯枝を拾ひ來り、椽の缺けた爐に燻べ、耳の缺けた四角い湯釜を天鈞に釣り下げ、眞黒けの竹の柄杓で汲んでは飲み、汲んでは飲み、燻つた顔をつき合せ乍ら目玉許りをキ、ロ、づかせ、又煽り乍ら、何かブツ／＼不機嫌な顔をして囁いて居る。

高姫「これシャルさん、お前も此處へ來てから大分日日が立つたやうだが、もう些こ此生宮の精神が分りさうなものぢやないか。朝から晩迄灰猫のやうに爐の傍にへべりついで、湯ばかり餓鬼のやうにガブ／＼呑んで居ないで、ちつと外へ出て活動しては如何だい。第一靈國の天人の身魂日出神の生宮に亡者引をさして、お前は灰猫爺のやうに燻つて居ても、社會のため貢獻する事が出來ないぢやないか。ちつと活動して貰はなくては、どうしてウラナイ教のお道が開けますかい。お前さんも見掛によ

らぬ、ごたほいものだなア」

シャル「そりや何をおつシャルのだ。よう考へて御覽なさい。こつ俄に陽氣が悪くなり夜とも晝とも分らぬやうな世の中にどうして活動が出來ますか。外はビュ／＼と風が吹き、霜柱が立つて、鶉さへも怖さうに啼いて居るぢやありませんか。日の出の神の生宮なら些こ日輪様でも登つて貰つて陽氣が暖かくなるやうにして下さい。これ程活動せうと思ふても體が縮こまつて、寒うて淋しうて何だか怖ろしうて手も足も出せないぢやありませんか。日の出神様も好い加減なものですよ。これ程毎日日日頼むのに日一日と寒くなる許り、こんな薄着でどうして日が越せませうか」

高姫「エ、譯の分らぬト、助だなア。いつも云ふ通り苦勞の塊の花が咲く御教だ。寒い目をするのも飢い目をするのも苦しい目をするのも皆神様のお恵だよ。現世は假

の世云ふて、限りがある。さうせ一度は死なねばなりませんよ。死んでから、エターナルに無上の歡喜を攝受し、天國の住民として暮さうと思へば、五十年や百年寒い目をしたつて飢い目をしたつて安いものだ。肉体を苦しめて、靈を鍛へ上げ、立派なく神の生宮となるのだよ。此高姫の事を考へて御覽なさい。何程日の出神の生宮云ふたつて、肉体が有る限り矢張りお前さんと同じやうに寒い時には寒い、飢い時には飢いのだ。結構な火と水とを戴いて喉が乾けば水を頂き寒ければ火を戴いて暖まる、何と云ふ勿体ない事を云ふのだね。火と水とお土の御恩を忘れては人間は此世に立つてゆけないと何時も云ふぢやありませんか。扱てもく覺悟の悪い健忘症だなア、苦しいのが結構だよ。苦しみの後には屹度樂しみが来る、寒い冬の後には春が来る。何程冬を春にせうとて、それは天地のお規則だから人間が左右

する事は出来ませんぞや」

シャル「何程、火の御恩を仰有つても、こつ日月の光もなく、四面暗瞻として闇が碎けたやうに、空から落ちて来ては根つから火も暖かう無いぢやありませんか。此處の火は、何だか水の中に尻を放つたやうに力がありませんわ。何程焚いてもく體が暖まる所へはゆかず、煙たい許りで、焚物迄が腹を立て、ブツ／＼小言を云ひ、シユン／＼と涙迄落して居るぢやありませんか。こんな火にあたつたところで燈明の火でお尻を炙つて居るやうなものです。此頃の火は老耄たのでせうか、てんと勢力がありませんわ」

高姫「これ、何と云ふ勿体ない事を云ふのだい。お燈明で尻を炙つたやうだなさ、は怪体の事を云ふぢやないか。お前さんは靈が悪いから、精靈が籍を八寒地獄に泊いて

居るから、夫で寒いのだよ。妾のやうに御神徳を頂きなさい。精霊は地獄、肉体は入嚮に彷徨ふて居るやうな事で、どうして神の生宮と云へますか」

シャル 「何だか知りませんが、高姫さんの仰有る事は些ども腹に這入りませんがなア」

高姫 「定つた事だよ、そこら中泥坊に歩いて居たやうな悪黨者だから、一旦染み込んだ灰汁は容易に落ちませんわい。鹹水晶の塊の日本魂の結構なく、生宮さんの身魂と、蛆虫の生いた糞まぶれの身魂とは、どうしてもパツが合はないのは當然だ。何を云ふても最奥第一靈國と最下層地獄に靈を置いて居る者との應對だから、妾が云ふ事が分らぬのも無理はないが、併しこう永らく妾の傍に居るのだから、もしは身魂が研げさうなものだが矢張身魂が我羅苦多だから骨の折れる事だよ。毎日日日前一人にか、つて言靈の原料が無くなる程説き諭して居るのに、鶉の毛の露程も改

心が出来てゐないぢやないか、盲聾と云ふものは、どうにもかうにも料理の仕様が無いものぢやなア。天人の靈にこの高姫が一言云ふて分る事を、地獄靈のお前には數百萬言を費さねばならぬのだから、本常に厄介者を引張込んだものだ。是でも神様は至仁至愛だからトコトン改心させねばならぬ。お前さへ改心して呉れたら、世界中一遍に改心すると底津岩根の大神様が仰有るのだから何卒日の出の神が手を合して頼むから、聞いて下さい。神も人一人改心させうと思へば骨が折れるぞよ。ちと神の心も察して下されよ。日出の神の生宮の申した事は一分一厘毛筋の横巾程も間違ひはムらんぞよ」

シャル 「高姫さん貴女の仰有る事は、一から十迄間違ひだらけぢやありませんか。一つだつて貴女の仰有つた事が的中した事が無いぢやありませんか。よう其れ程間違つ

た事を云ふて置いて、自分から愛想が盡きない事ですな。……明日は日輪さんを出してやらう、若しこれが間違つたら日出の神は此世に居らんぞよ……と啖呵を切つて置きながら、其日になるに、ザア／＼と雨が降り、其處邊が眞黒けになつたやありませんか。その時になつてお前さんは何んな顔をなさるかと考へて居れば……あ、日の出神様御苦勞様でムいます。日輪様がお上りなさらないのも御無理はムいません。此高姫の傍には身魂の曇つたものがシャ、ツついて居るから、仕様がムいません。……と何か何と甘い理屈をつけて済まし込んでムるのだから、私も愛想が盡きました。よう考へて御覽なさい、假令私が極悪人であらうとも一人の爲にお日様が出なかつたり、空が曇つたりするやうな道理がありませんか、萬一私に曇りがあるために天地が曇るのなら私の一舉一動は天地に感動して居るやうなもの、そんな偉いもの

のぢやありませんまい。お前さんは私の悪口を云ひ乍ら、私を天地稀なる比類無き英雄豪傑にして下さつたやうな者だ。其處邊の點がどうしても私には合點がゆかないのですよ」

高姫「エ、何をつべこべと下らぬ理屈を云ふのだね。お前は因縁の悪い身魂だからバラモン教からは追ひ出され小盗人からは除ね出され、せう事なしにこの高姫の尻に喰ひついて居るのぢやないか。お前のやうな我羅苦多が天地を動かすやうな力はあるさうな事はない。併し乍ら神様がお前を世界惡の映象として三五教の變性女子のやうに型に出してムるのだから、世界の惡身魂がお前に寫り、お前の惡身魂が世界に寫るのだ。それだからお前さへ改心して呉れたら世界中が改心致すと云ふのだよ。この日出の神は天も構へば地も構ふ。又八衢も構う、大ミロク様の太柱だから、零

落ちて居ると思ふて侮りて居ると、スコタンを喰ふ事が出来ませぬぞや。先を見て居て下され、先になりてから、……あ、高姫さんは立派なお方だつた、こんな事なら、口答も致さず、も些と許り大事に致し敬ふて居たらよかつた……地團駄踏んでも後の祭り、何程其處になりて……改心致しますから助けて下され……云つても日出の神は知りませぬぞや。さうだから今の中に柔順しう致して素直になさるがお主のお得だ。此世でさへも切替があるのに何をグズ／＼してゐるのだ。早く心の切り替をなさらんかいなア」

シャル「高姫さん本當ですかいな。そんな事云つて大法螺を吹くのぢやありませんか、口から法螺を吹き、尻から喇叭を吹くのは當世の流行物ですからなア」

高姫「それはお前の悪が水晶の鏡の此生宮に寫つて居るのだよ。……人の事だと思ふて

居ると皆我事だぞよ……變性男子のお筆に出て居るぢやありませんか、犬が魚を喰わへて一本橋の上を渡る、水の底にも亦一匹の犬が居て魚を喰わへ倒に立てつて歩いて居るのを見て……此奴怪しからん奴だ足を天にし背中を地にして歩いて居る。一つ叱つてやれ……ワンと云ふた途端に口に咬へて居た魚がバツサリと水中へ落ちたと云ふ話があるだらう。恰度お前さんは橋の上の犬だ。水晶の水鏡、即ち高姫の靈にお前の醜い靈が寫つて何事も逆様に取られるのだぞよ。墓蛙の膏を取る時には四方八方ガラスを立てた箱に入れて置くと、四方八方に自分の醜い姿が寫るので、自分の敵と思ひ、彼方に突き當り、此方に飛びつき、終の果にはすつかり疲れて膏を出してカンビンタンになつて死ぬものだ。この高姫が悪く見わるのは約りお前さんの靈が悪いのだ。

立ち向ふ人の姿は鏡なり

己が心を寫してや見ん。

と云ふ道歌を考へて御覽なさい、皆人が悪く見わたるのは自分が悪いからぢやぞへ。ても扱ても犬蛙人種と云ふものは仕方のないものだなア」

シャル「高姫さん、善言美辭の教だと何時も仰有るが随分悪言暴語を放出なさるぢやありませんか。それでは神の資格はゼロですよ」

高姫「それや又何と云ふ分らん事を云ふのだね、最前からあれ程鏡の喩を引いて説明してやつたぢやないか、エ、鈍な身魂は困つたものだなア。高姫が悪言暴語するのはお前さんの靈が寫つて居るのだ。いやお前さんのためだ。此高姫は半鐘のやうなものだ。柔かく打てば柔かく響く、強く打てば強く響く、高く打てば高く響く、低く打

てば低い音が出るのだ。お前さんが下らぬ口を叩くからこんな言葉が出るのだよ。お前さんがモ些と素直になり、長上を敬ひ、もつと柔しき言葉を使へば柔しくなるのだ、……此神は従つて来れば誠に柔しき神であるなれど、敵對心で神の前に来て見よれ、鬼か蛇の相好になるぞや……」

シャル「もし高姫さん、そりや現界の理屈ぢやありませんか、至仁至愛の大ミロク様なら、悪人が来れば尙可愛がり、善人が来れば又可愛がり、決して憎惡の念をお持ちなさらないのが神様でせう。己れに敵する者に對して鬼畜の相を現はし、己に従ふ者には柔和の相を現はすと云ふのなら、お前さんを尊敬する事が出来ませんわ。何んな悪い者でも此方が親切にしてやれば喜んで従ひ、きつと恩返しをするものです。己に従ふものを愛し、敵するものを憎むのなら、それは自愛であつて、八衢人足や、

地獄界の邪鬼のする業でせう。神様は決して憤慨したり憎悪したりなさるものぢやありませんぞ。神様がもし憎悪の念を起したりなさるゝすれば、神自体が既に亡ぶぢやありませんか」

高姫「エ、第一靈國の天人の申す事がお前さん等に分るものか、モ些々修業なされ、器が大きくなつたら此高姫の申す事が明白分るだらう。夫よりも早く四辻に出て旅人を引張つて来なさい。こゝう毎日日日結構な光陰を空費して居ては、天地の神様に勿体ない、一人でも改心さしてウラナイ教の信者を拵へねば、天地の神様に濟まない。お前も此世に生れて来た甲斐があるまい。サア、さつと、四辻迄行つて来なさい」

シャル「高姫さん貴女も一緒に来て下さらぬか。又文治別とか云ふエンゼルがやつて来

たら困りますからなア」

高姫「エ、何と云ふ氣の弱い事を云ふのだい。文治別なんて、あんな者が千人や萬人東に結ふて来た所が、こたへるやうな生宮ぢやありませんぞや」

シャル「ハ、、、。こゝ迄も我執の念の強い人ですなア。山を越へ、谷を越へ荆棘掻をしながら、のたくつて逃げたぢやありませんか。なぜ夫程偉いお方なら、あのエンゼルを此處にじつとして居て回ませてやらんのですか」

高姫「エ、分らん男だなア。國治立尊様さへも謙讓の徳を守り惡神に世を譲つて良へ退却なさつたぢやないか、そこが神様の尊い所だよ。此生宮も變性男子の系統ぢやから、謙讓の徳を守つてエンゼルに花を持たせて逃げてやつたのだよ。救世主の仁慈無限の精神が小盗人上りのお前に分らうか。「物言へば唇寒し秋の風」と、可

借口に風を引かすより、茲は一つ沈黙を守らう。サア早く四辻に行つて來なさい」シャル「エ仕方がありません、そんなら暫く行つて参ります。あゝ寒い事だなア。こんな事なら高姫さんの傍に居るぢやなかつたに。今更ベル、ヘルの仲間と逆轉するに云ふても寄せても呉れまい。毎日日亡者引をやつては撥ね飛ばされ、云ひ負され耐つたものぢやないわ」

とブツ／＼小言を云ひ乍ら、霜柱の置いた一本橋を怖さうに跨けながら出で、行く。

(大正一二、三、二五、舊二、九、於皆生温泉、加藤明子録)

第一〇章 轉

香 (一四六〇)

寒風吹き捲くる四辻に若芽のやうな弊衣を纏ふて唇まで紫色に染め、慄ひ／＼立つて居る一人の男はシャルであつた。シャルは道別の立石に凭れてブル／＼慄ひ乍ら一人呟いて居る。

シャル「エー糞面白うもない。此風の吹き放しに罪もないのに立たされて…石地藏でもあるまいに……俺等は、これでも血液が通つて居るのだぞ。高姫の婆奴、人を滅多矢鱈に、こき使ひやがつて、馬鹿にしてやがる。此寒いのに斯んな處に亡者引きに來る位なら矢張り泥坊でもやつて居た方が何程男らしいか知れやしないわ。水の流れど人の行末、變れば變るものだな。俺もバラモン教の軍人さんで公然と強姦もや

り、強盗もやり、法螺も吹き、喇叭も吹いて来たものだが斯う零落れては、もう仕方がない。腹は空腹となる、喉は渴く、着物は破れ虱はしがむ、何處ともなしに身体は裸ひ出す、宛然地獄の様だわい。一丈二尺の禪をかいた荒男がアトラスの様な面した婆に、こき使はれてアタ胸糞の悪い、糞面白うもない、ケツタ糞が悪いわいそれにまだくケツタ臭い事は高姫の奴、俺の放れた糞小便を掃除せいと吐しやがる。金勝要の大神さんだつて雪隠へ落されたのだから、お前等が雪隠の掃除するのは結構な御神徳だ等と、本當に馬鹿にして居やがる。實に糞慨の至りだ。だに云つて何處へ行く所もなし、八尺の體の置場に困つて居るのだからチットは氣に喰わいでも、あの婆に喰いついて居るより仕方がないわ。エー糞忌々しい。誰か尙一人俺の云ふ事を肯く奴が来て呉れると雪隠の掃除をさしてやるのだが、来る奴く、高姫

と喧嘩して逃げて去にやがるものだから、宛然籠に水を入れて居る様なものだ。何時迄か、つたつて満足な信者は一人だつて出来やしないわ。ウラナイ教が何か知らぬが教祖も、し、役員も、し、信者も一人でかねてるのだから婆も忙しいだらう。此間も信者が幾何あると聞いて見たら四十一人あると吐しよつた。よく考へて見ればアタ阿呆らしい、四十と云ふ意味は始終と云ふ意味だつた。今年で殆んど四十四年も布教してると云ひやがつたが、まだ三人四人と信者が出来んものだから大したものだわい。姑の十八ばかり朝から晩まで並べ立てやがつて、一人よがりの一人自慢、上げも下しもならぬ糞婆だ。年は幾才だと聞いて見たら四十九才だと吐しやがる。俺の見た所では、さうしても五十五六に見ゆるがヤッパリ年寄と見られるのが辛いと見ゆるわい。何だか知らぬが始終臭い事ばかり吐しやがる。アタ辛氣臭い

もう厭になつて了つた。誰かよい馬鹿野郎が出て来て俺の仕事を手傳つて呉れる奴があるまいかな」

と自棄糞になり四股を踏み乍ら一人嗷鳴つて居る。そこへ向ふの方から寒さうな風姿をして稍俯向き氣味に破れ笠を被り臭氣紛々たる着物をつけ乍ら、やつて来た蒼白い中肉中脊の男があつた。シャルは此男を見るより大喝一聲「待て」と叫んだ。男は此聲に驚いてハッとして立止まり、少し尻を後へ出し、両手を金剛杖の上にキチンと載せ乍ら、

男「何用でムいますかな」

シャル「何用でもない。一寸尋ね度い事があるのだ。貴様の姓名は何と云ふか」

男「はい、私は元はアブナイ教の信者でムいまして鰐口曲冬と云ひ今は人間の一等厭

ふ一等厭と云ふ偽君子の団体へ這入つて懺悔の生活をやつてる者でムいます。さうか小便壺、雪隠壺、塵芥場の掃除をさして頂けませんだらうかな」

シャル「や、そいつは感心だ。大に吾意を得たりと云ふべしだ。實の所、俺の館にはここ三月許り小便、糞は云ふに及ばず、汚い塵芥が庭の隅にかためてあるのだ。さうだ、掃除して貰ふ譯には行くまいかな」

曲冬「謹んで掃除をさして頂きます。十分の活動を致しますから、何卒麥飯でも宜いから饗んで頂き度いものです」

シャル「小便はシ、シと云ひ、糞はフ、フと云ひ、塵埃はジ、ハ埃と云ふから獅子奮迅の活動をやつて見せて呉れ。さうすりや俺の師匠の入笠しやの高姫も麥飯の一杯位は饗んで呉れぬ事もあるまい。兎も角、お前の働きた次第だ。藝は身を助けるに云ふから屹

度お前も高姫さんに重寶がられるだらう。さアこれから一つ歸つて高姫さんに對して信者を造つたのを土産となし、俺の仕事を手助けして貰ふ事ともなり一舉兩得だ。まアこれで俺も一寸息が出来ると云ふものだ。おい曲冬とやら、永らく俺の部下となつて雪隠の掃除だけ受持つて呉れ。何と懺悔の生活と云ふものは重寶なものだのう」

曲冬「初稚姫さんは天刑病者の濃血を吸うて助けてやられた事があるでせう。糞小便の掃除位が何ですか。人間は皆糞小便を喜んで喰つて居るのですよ。直接に喰ふ奴は犬だけと間接に喰うのは皆人間です。糞垂ては大根、蕪、稻、麥等にかけて、その肥料で野菜が成長し、米麥が實るのだ。云はゞ間接の糞喰ひ、小便呑み人間だ。糞の掃除位が、何それ程汚いものか。喜んで汚い處の掃除をする心にならないと本當の

善にはなりませんよ。これが誠の神心ですから。己の欲する所を人に施し、己の欲せざる所を努めて行はなくては懺悔の生活ではありませんわい」

シャル「いや感心致した。さ、來て下さい。お前さんの事業は何程でも溜つてる、随分好い顧客だよ」

曲冬「はい、有難うムいます」

と云ひ乍らシャルの後に從ひ冷い野分に吹かれ乍ら岩山の麓の茅家に導かれた。

シャルは斜になつた戸を、がたつかせ乍ら漸うに引き開け、

シャル「さ、曲冬さん、此處は大彌勒様の金殿玉樓だ。まア這入つて冷い茶なつと一杯飲つて下さい。もし高姫さん、よい鳥を一羽生捕つて來ました。さア何卒お前さんの大和魂で、好きすつほうに料理して下さい。屹度此奴アお氣に入るかも知れま

せぬぜ」

高姫「これくシャル、結構な人間様を御案内し乍ら何と云ふ御無禮な事を申すのだ。

何故善言美詞を用いないのか。悪言醜詞は禁物だ、何時も云つてあるぢやないか
く」

シャル「エ、酢につけ、味噌につけ、何とかがんとか叱言を云はねば氣の済まぬ人です
な。此人は一等厭の曲冬さんとか云つて懺悔の生活をして居る偽君子ですよ。貴方の
辯舌で一つ歸順させて御覽なさいませ。そして便所の掃除をさして呉れと仰有る
のです。何とまア結構なお方もあればあるものですな」

高姫「あ、曲冬さんごやら、そこは端近、まア圍爐裡の側へお寄りなさいませ。寒か
つたでムいませう。此婆は斯う見ても見かけによらん優しい者だから安心して下

さい。そしてお前さん、懺悔の生活をしてると云ふ事だが、懺悔せんならんやうな
悪事をしたのかい」

曲冬「はい、これと云つて別に悪い事をしたやうにも思ひませぬが、人間と云ふものは
知らずくの罪を作つてるものですから懺悔のために、人の一等厭な便所の掃除や
塵芥場の掃除をさして頂き、其處邊を巡つてるのでムいます」

高姫「扱てく奇特な事だ。併し乍らよう考へて御覽なさい。便所の掃除をするのは女
房や女衆の役ぢやありませんか。男は男としての立派な事業があるでせう。それに
何ぞや、罌丸提げた男が卑怯未練にも便所の掃除をするとは、チと可笑しいぢやあ
りませんか。お前さん等が、そんな事をするものだから此頃の女中は皆増長して下
ひ、「私は下女には來たが便所の掃除は約束外だ」と、自分の放いたもの迄主人の

奥さんに掃除さす様になつたのも、皆お前等が悪いからだ。世界の男子が、何れも之も一等厭に這入り、便所掃除になつたら如何するのです。自分の放いた糞まで人に掃除させたり、又人の糞まで掃除して歩く様な不合理な罰當りの事が何處にありませんか。それだから世間の人は一等厭の奴はド奴の糞奴許りだ云ふのですよ。何だか怪体な香がすると思へばお前さんの着物に尿糞塵の香が浸み込んで居る。地獄に籍を置いたものは鼻をつく様な推糞の場所や便所塵芥場を喜ぶものだ。其臭氣をまるで高天原の天香の様に思ふて居るのだから困つたものだ。鼻もそこ迄麻痺しては善惡美醜の區別もつかなくなり、却て樂かも知れない。併し乍ら折角神の分靈を貰つてる人間が醉生夢死の生活を送るのも勿体ない。自分の放いた糞は自分で掃除すれば宜いのだ。人の放いた糞まで掃除させたり、したりするものぢやない。

他人に糞の掃除をさせるのは赤坊の間だ。又その糞を掃除するものは赤坊を負ふた母親が、子守の仕事だ。チツと考へて御覽なさい」

曲冬

「さう一言にコキ下されては便明の辭がありません。併し乍ら一等厭は一等厭としての主義綱領があります。どうか便所の掃除をさして頂き度いものですか」

高姫

「いや／＼なりません。何と心得てゐる。こここの便所は普通一般の便所とは違ひますぞや。勿体なくも大彌勒様のお尻から出たお肥料様だ。そこへシャルの汚い奴も交つて居るが、然し此館にはシャルと云ふものが居りますから……こここの便所なんか身魂の研げん人に構つて貰ふ事は出来ませぬ。仲々大彌勒さんの便所の掃除をさして貰はうと思へば普や大低の事ぢやありませんぞや。餘程神徳を貰はなくちや出来ませぬ。そんな事云つて麥飯の一杯も饗ばれやうと思つてるのだらうが、此の辛

い世の中に、誰がそんな糞奴に飯の一杯も食はずものがありますか。それよりもチツと日出神の義理天上が申す事を腹へ締め込んで置きなされ。さうすれば結構な出世が出来ますぞや。折角結構な人間と生れて便所の掃除をやつて居つては神様に對しても濟まんぢやありませんか。お前さんの様な連中が澤山出来て便所の掃除を引受けて下さるのは宜しいが、これが百年も將來に行つて御覽なさい。世間から特種部落扱ひをされて便族と云ふ名がつかますぞや。さうすりや普通の人間と縁組も出来ませぬぞ。宜い加減テンコウをして置くが宜しからう。特種部落の開祖になる積りだらうが、そんな事するより三千世界を助けるウラナイ教にお這入りなさい何程結構だか知れませぬぞや」

曲多

「それもさうですな。實の所は厭で堪らないのだけ、喰はんが悲しさに人の厭が

る便所の掃除をして其日の飢を凌いで居るのです。それでも世間は馬鹿者が多いと見て一種の態よい乞食を聖人だ、君子だと崇めて呉れますからな。新聞や雑誌に書き立て、褒めるのですもの、チツと位臭くても辛抱が出来たものですよ。併し乍ち天香宗の教祖様は表から見れば随分立派なお方ですが、ヤッパリ株を賣買したり、儲かりさうな鑛山を買占めたり、借つたものは何とか云つて返さず、取り込む事は随分上手ですよ。それでも上流社會から非常に褒めそやされ、澤山な書物が賣れるのですから世の中は妙なものですな。兒島高德が櫻の木に「天香雪隠を空しうする勿れ、時に飯禮無きにしも非ず」と云つて私の狂福さんの事を豫言しておいた位ですもの、餘り馬鹿にはなりませんぞ」

高姫「さ、それが暗がりの世の中と云ふのだよ。善人は悪と知られ、悪人は善人と推稱